

埼玉古墳群の構成原理

関 義 則

はじめに

古墳時代後期を通じて大型墳が継続的かつ密集して造営されているという点で、埼玉古墳群は東国の大規模古墳群の中においてもひときわ特徴的である。

それ故、この古墳群は古く江戸時代の地誌類にしばしば登場し、明治年間には早くも武藏国造一族の奥津城に擬せられるなど多くの研究者・好事家の注目を集めてきた。戦後には『日本書紀』安閑天皇元年の条にみえるいわゆる武藏国造の争乱の記述と関連づけられて議論が展開されるなど、古墳の被葬者や性格論に関心が集まり⁽¹⁾、さらに1978年に古墳群中の稻荷山古墳から出土していた鉄劍から115文字の金錯銘文が発見されて以降は、銘文の解釈を巡る議論がそれに加わり稻荷山古墳や埼玉古墳群の性格についても新たな視点をもとに多岐にわたる議論が展開されている。

その一方で、1966年の「さきたま風土記の丘」の整備に着手以降、継続的な学術調査によって、大型墳における方形二重周堀の画一的採用や主要古墳における後円部及び中堤の造出しの存在、さらには形象埴輪群や供獻土器に代表される出土遺物の様相など、各古墳にかかる情報も相当程度に蓄積されてきている。しかしながら被葬者論とは対照的に、これらの考古学的情報にもとづく古墳群そのものの分析ということになると必ずしも十分に取り組まれているとはい難いようだ。とりわけ、大型墳の主軸方位の統一性と密集性というこの古墳群の景観を決定づけている古墳配置については、多くの研究者によって埼玉古墳群の特質としてしばしば言及されるものの、その要因や背景については未だ十分に合理的な説明がなされるには至っていない⁽²⁾。

埼玉古墳群の古墳配置構造に関する先行研究は決して多くはないが、増田逸朗氏が1980年代初頭に前方後円墳の主軸方向を基準として古墳間相互に有機的な関係が認められるとするいわゆる連関規制論や埼玉古墳群の主軸方位が周辺地域の前方後円墳に対して特定の方位を排他的に独占しているとする方位規制論を唱えた一連の論考は、遺跡や遺物に則してこの古墳群をとらえようとする優れた研究であった(増田1980・1981)。増田氏の視点は、古墳の配列や主軸方位に一定の企画性を見出し、そこに被葬者間の質的な格差や政治的な意味を読み取ろうとしたもので、後に増田説に追従した見解や(山本1991)、啓蒙書等にも紹介されたことから(高橋2005)、この説は広く周知されるところとなり、半ば通説化している感もある。しかしながら、古墳主軸方位の在り方を埼玉古墳群の造営主体による政治的な規制行為と結び付けることになったく疑問がないわけではない⁽³⁾。もし、権力構造の表現手法のひとつとして一定領域内における古墳主軸方位による築造規制というようなものが存在したとするならば、古墳の性質から考えて同様の現象が日本列島内で普遍的に確認されてもよいはずであるが、実際には各地の古墳群にこうした様相を見出すことは難しい。

このような古墳存在意義の根幹に関わる観念が北武藏地域のみに存在したとするのは合理的



第1図 埼玉古墳群全景

とはいえないであろう。また、方位規制の及んだ範囲を首長の政治的・経済的支配領域として把握しようとする立場も、後に述べるように大首長層の支配領域や経済圏をどのようにとらえるかという根本的な問題があり、そもそもこの考え方ではこの地域の政治構造が埼玉古墳群の存続する期間にわたり大首長と地域首長の間で整然としたピラミッド構造を成していたこ

とを前提とするものであるが、それは既応の研究成果に裏付けされたものではなく、いわば未証明のことがらであって無条件で肯首することはできない。さらに主軸方位の僅かな差異が古墳被葬者の系列の視覚的表示ととらえることそれ自体も、当時においては地上で見上げるしか適わなかった古墳について、今日の詳細な測量図や上方からの航空写真によってようやく認識可能な振幅が古墳被葬者の系列差別化の手法として現実に機能していたのであろうかという素朴な疑問もある。

このような理由から、筆者も埼玉古墳群における古墳配列は偶然の産物ではなく造営主体の意思が反映しているとする立場に拠りつつも⁽⁴⁾、古墳主軸方位を基準とした築造規制論は受け入れ難く、それとは異なる古墳配置構造を決定する要因となった何らかの築造原理がこの古墳群に存在していたものと考える。それをこれまでに蓄積された考古学的な情報の中から読み解くことはできないであろうか。

列島各地の古墳群が、その形成に当たり将来にわたる古墳配置について事前に計画決定されていた、あるいは将来にわたる古墳の造営それ自体が既定事項であったという状況は、これまでの古墳研究の蓄積からみる限り認めることはできない。埼玉古墳群でいえば稻荷山古墳を造営する際に、半世紀以上後の鉄砲山古墳の造営場所がその時点で既に予定されていたとは到底思えない。古墳造営の契機はなお定かではないものの、造墓の決定や造墓地の選定は造営主体たる生前の被葬者もしくは後継者の意思に基づいて、その都度に決定されたものであることは、ある程度信頼性のおける7世紀の墳墓造営に係る記紀の記述を参考にしても疑い得ないであろう。

古墳の築造に際し、あらかじめ墓域内における造墓地点が定められていなかったとするならば、造営主体は墓域内における造墓可能な空間の中から古墳築造が要請された時点で任意の地点を選択しているということであり、選定に際しては与条件として地形等による一定の制約を受けつつも、モニュメントとしての古墳が最大限にその効果が発揮できるよう、築造時には築造条件の相対的に優れた地点を選択していたに違いない。つまり、古墳群における各古墳の配置状況が示すものは、あらかじめ定められた配置計画の結果ではなく、時系列に沿って何らかの基準や判断に従って造墓地点が選択された結果の累積なのであり、造営主体が築造の時点で常に最良の地点を選択しようと心掛けたとすれば、時間的に先行する古墳ほど相対的に適地を占めているという前提が成り立つ⁽⁵⁾。造墓場所の選択基準が、古墳群の形成を通じて不变であったという保証はないけれども、埼玉古墳群のように古墳群中における各古墳の配置に一定の偏在性や企画性が全体的な傾向として明確に窺えることは、それが事前に配置が決定されていたものでないかぎり、各古墳の造営を担った造墓主体の間に古墳造営に関して墳形や構造ばかりでなく立地についても共有する規範や意識が通時的に存在し現実にそれが機能していた、つまり選地の選択基準が古墳群の形成期間を通じて不变だったからにほかならない⁽⁶⁾。従って、埼玉古墳群では、古墳の造営地点を時系列で追うことで、各古墳が築造時に何が最優先されたのか、彼らが有していた規範や共通意識を窺い知ることが可能になるものと考える。

本稿では、こうした立場からこれまでの考古学的な調査成果を踏まえた各古墳の構造の分析を手掛かりに、築造のプロセスと各古墳の選地という視点から、埼玉古墳群が今日のような景観を呈するに至った造営主体の築造意識や築造原理を探り、その意味するところについて考察

を加えることとしたい。

1 大型古墳の築造時期

古墳群の造営傾向を把握するためには、この古墳群の各古墳がどのような時系列に沿って造営されたのかということをあらかじめ確認しておく必要がある。

埼玉古墳群は8基の前方後円墳を含む11基の大型墳と多数の小円墳で構成されている(第1図)⁽⁷⁾。大型墳のうち、主体部の内容が調査等によって判明している古墳は、稻荷山古墳と将軍山古墳の2基の古墳に限られている。しかしながら、これまでの整備に伴う発掘調査の所見や出土した土器や埴輪等によって、主体部が不明な古墳についても、ある程度の年代を絞り込むことが可能となった。特に円筒埴輪の分析は近年とみに精緻化しており有効な指標のひとつとなっている(城倉2011)。さらに、この地域では出土遺物以外に、降下火山灰の痕跡もまた古墳造営の先後関係を割り出すために有効な指標となっている。すなわち群馬県榛名山は古墳時代後期に2度大噴火したことが判明しており、その際の火山噴出物について、6世紀初頭頃と推測される一度目の噴出物は榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、6世紀の中頃に大量の軽石が噴出された二度目の噴出物は榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)と呼ばれている(石川他1979)。いずれも火口の東方向に噴出され榛名山東麓では厚く堆積しているが、Hr-FAは、より広範囲に拡散し埼玉県北部地域でもかなりの降灰を確認することができる。坂本和俊氏によってHr-FAが県北の遺跡・遺構間の先後関係に活用できることが喚起されて以降、次第に研究者の注意が向けられるようになった(坂本1981)。なお、Hr-FAの降下時期は従来ほぼTK47型式とMT15型式の端境期とする理解が大勢であったが(坂本1996)、最近になってHr-FAの直下にMT15型式の須恵器が存在する事例がいくつか確認されるようになり、降下時期は従来の想定よりもやや下ってMT15型式の新しい段階とする意見も提出されており、降下時期の実年代を含め多くの問題を孕んでいる(酒井2002、藤野2009)。ここでは、大づかみであるがMT15型式内にHr-FAの降下があったとみなしておく。

各古墳の年代については今なお確定できない部分もあるが、こうした指標をもとに以下、既往の成果を踏まえつつ各古墳の年代を改めて確認しておこう⁽⁸⁾。

稻荷山古墳の後円部造出し付近から出土した須恵器群は、壺蓋、有蓋高壺、穂があり、TK23型式もしくは後続するTK47型式の古段階とみなされている⁽⁹⁾。須恵器と主体部の関係についてはいくつかの組み合わせが想定されているが、調査された礫櫛や粘土櫛から出土した遺物の年代と須恵器の年代は矛盾しないものと考えている⁽¹⁰⁾。検出された円筒埴輪には胎土・色調や調整が異なる4種類が認められるが、その中に半円形容を持つものがあり、特定の種類にはB種ヨコハケを部分的に残すものも存在する。この4種類の埴輪を樹立の時期差としてとらえようとする見解(若松2007)と同時期の所産であり生産地の違いを示すものとする意見(城倉2011)が対立しているが、時期差と考える立場においても最古段階に位置づけた埴輪A類を他古墳との比較検討からTK23型式期頃とみているので、遺物から導き出された年代観と大きな齟齬はない。周堀底から60cmほど浮いた位置でHr-FAと推定される粒子が堆積していたこととも矛盾しない。なお、この古墳では未知の主体部を想定する見解もあり(白石1985)、その存在の有無によって古墳の築造年代が若干変動する可能性が残されているとしても、稻荷山古墳が埼玉

古墳群で最初に築造された大型墳であることは動かない⁽¹¹⁾。

二子山古墳から出土した須恵器には、壺、甕、壇、器台、提瓶、高坏等があり、いずれも細片であるが長脚化傾向にある大型の高坏の破片や提瓶の存在から判断すればMT15型式に位置づけられるものでありTK47型式以前に遡るとみなせるものは存在しない。その一方で周溝底からやや浮いた位置に薄く堆積している暗灰色土層に含まれるテフラ粒子はHr-FAと推測されている。先の降下時期を勘案すれば古墳の築造年代はMT15型式新段階以前ということになり、須恵器の示す年代とやや微妙な関係になる。また、方形窓が残る5条6段構成の円筒埴輪は稻荷山古墳の前方部に近接する小円墳でTK47型式の須恵器蓋坏が出土した梅塚古墳(埼玉2号墳)出土埴輪よりも古相であるとする見解もあり(坂本1996)、須恵器の示す年代とはかけ離れている。今のところ、二子山古墳出土の須恵器の大半は細片で表採資料も含まれる不安定な資料であることを踏まえ、埴輪を重視して二子山古墳の年代をTK47型式期まで上げる意見が有力である。

丸墓山古墳では、主体部が未調査であるものの周堀の範囲確認調査によって土器や埴輪片が若干確認されている。このうち土器はいずれも須恵器甕や土師器などの細片のみで年代の決め手に欠ける。埴輪については、細部の特徴から二子山古墳の埴輪よりも先行するという見解(杉崎1978・城倉2011)と二子山古墳の埴輪よりも後出するという見解(坂本1996・若松2007)が対立している。その中で、城倉正祥氏は丸墓山古墳出土の埴輪3種類のうち、A・B類が稻荷山古墳出土例に酷似すること、C類は稻荷山古墳から二子山古墳へとつながる過渡的な特徴を有していること、さらに三本突帯の残存的な三稜突帯の個体が存在することなど埴輪自体の系統的な変遷を根拠に丸墓山古墳を稻荷山古墳と二子山古墳の間に位置づけており、生産遺跡での動向も踏まえたもので説得力に富む見解である。しかしながら、丸墓山古墳では墳丘裾に入れたトレーナー調査によって、古墳築造前の旧地表面にHr-FAと推定される薄い灰色層が確認され築造時期はHr-FA降下後であることが報告されており(田中1994)、二子山古墳周堀内の堆積物がHr-FAで正しいとすれば、丸墓山古墳との先後関係は動かし難く、城倉氏の唱える埴輪の先後関係とは整合しない。このように古墳の年代をめぐって埴輪と降下火山灰との関係に不整合が生じているのは、埴輪の生産と樹立段階の時間差の議論に加えて⁽¹²⁾、決定的な物証に思える降下火山灰についても、群馬県域と異なり降下火山灰の堆積が少ない当地域では肉眼観察による同定に限界が生じていることに起因する。二子山古墳や丸墓山古墳のHr-FAと推定される層について理化学的な分析が実施されていない現状では、降下火山灰もまた絶対的な拠り所にはなりえず、結局のところ先後関係の決め手に欠けると言わざるを得ない⁽¹³⁾。筆者の見解は後述することとし、ここでは両者をTK47型式期～MT15型式期の時間幅の中でとらえておく。

瓦塚古墳では、長脚一段三方透の無蓋高坏、大型器台、提瓶、横瓶、脚付壺、大小の甕等の須恵器が造出し周辺からまとまって出土している。須恵器には若干の時期差があり、MT15型式の新相からTK10型式期に相当する(利根川2004)。これは出土埴輪の年代観とも矛盾しない。

奥の山古墳は、最近の調査で後円部の造出し付近から須恵器がまとまって出土している。それらは子持装飾付壇を含む、大型器台、壺、長脚一段透の高坏などで、在地産を主体とするもののおおむねTK10型式新段階に位置付けられるものである⁽¹⁴⁾。やはり、出土埴輪の年代観とも矛盾しない。

將軍山古墳では、墳丘造出し付近から須恵器壇及び無蓋高壺、壺、甕、土師器壺など豊富な土器が出土しており、いずれも TK43型式の古相に収まるものである（岡本1997）。この壇の一部は MT85型式に相当するという見解もあるが（坂本1996）、そもそも両型式の区別は微妙な問題であり、MT85型式を採用しない研究者もいる。本稿でも酒井清治氏に提言の従い TK43型式と TK10型式の狭間の型式には TK10型式新段階の表現を暫定的に当てている。將軍山古墳の後円部の石室から出土した副葬品はやや新しい段階のものを含んでいるが、石室の構造や石室内から出土した須恵器高壺と造出し出土土器との間には大きな時間差は認められない。

鉄砲山古墳は、調査範囲が限定的で土器類の出土はほとんど認められずその位置付けは不安定である。微細な須恵器壺の破片を検討した利根川章彦氏は、概ね TK43型式から TK209型式と比較的幅広くとらえている（利根川2004）。しかしながら、後で述べる埴輪を有さない中の山古墳が TK209型式古段階に位置づけられることからすれば、埴輪を有する鉄砲山古墳が TK209段階まで下がるとは考え難く、TK43型式の中に収まるものとみてよいであろう。この古墳は從来から奥の山古墳と將軍山古墳の間に位置付けられていたが、最近では検出された円筒埴輪は突帯が扁平化したもので埴輪が検出された大型古墳の中ではもっとも新しく位置づけられ、將軍山古墳に後出するものとする見解がある⁽¹⁵⁾。生産地との対応関係を整理した城倉氏も鴻巣市生出塚埴輪窯において鉄砲山古墳に埴輪を供給している窯が愛宕山古墳や將軍山古墳に供給された窯である21・22号窯を切っていることから、鉄砲山古墳の時期はそれらの古墳よりも後出すると位置づけている（城倉2010）。その一方で、古墳築造企画からみると、稻荷山古墳、二子山古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳の各古墳がいずれも後円部径が全長の2分の一となる大山古墳型に属するのに対して、將軍山古墳は全長に比べ後円部径が小さくなってしまっており、中の山古墳も將軍山古墳と同企画とする分析もある。しかしながら、鉄砲山古墳や中の山古墳など墳丘部分が未調査の古墳では後世に墳丘が改変されている有無を確認することができず、現状では古墳築造企画に大きな信頼を置くことはできない。ここでは埴輪分析の結果に基づき、將軍山古墳が鉄砲山古墳に先行するとしておく。

中の山古墳では、長脚二段二方透の高壺、甕、器台等の須恵器が出土しているがそれらは細片であり詳細は不明である。ただし、この古墳では赤焼焼成の埴輪は認められず、代わって須恵質の埴輪壺が樹立されており、同工の製品が大里郡寄居町に所在する末野遺跡の第3号窯から出土しており、供給窯のひとつであることが判明している。末野第3号窯では、埴輪壺に長脚二段三方透の高壺や口径のやや大ぶりな蓋壺等が伴出していることが報告されている（福田1998）。従って、末野窯跡を介して、長脚二段高壺の二方透と三方透が共存することが確認される中の山古墳の時期は TK209型式の古段階に位置づけてよいであろう。中の山古墳は、須恵質埴輪壺の存在から埴輪消滅直後の古墳とみなしてよく、埼玉古墳群ではその前段階である TK43段階で埴輪の樹立が停止し、次期の中の山古墳の築造をもって前方後円墳の造営を終了したとみることができる。

円墳である浅間塚古墳と方墳の戸場口山古墳の両古墳では、埴輪が認められず中の山古墳に後出する前方後円墳消滅後の古墳とみてよい。両古墳ともデータが少ないので TK209型式期中段階～新段階頃ということになる。

なお、調査範囲が限定的で遺物の出土が少ない愛宕山古墳の位置づけは不安定であり、方形

透窓の円筒埴輪片の出土を重視して二子山古墳と略同時期とする見解があるが(杉崎1986)、城倉氏は上記の細片を除く愛宕山B群を生出塚遺跡 DE 地点21・22号窯の一括焼成品とみなし、生出塚編年II期後半として奥の山古墳～將軍山古墳の間に位置づけられるとした(城倉2011)。調査所見によれば、方形透窓を有する埴輪片は細片であり同種の埴輪片も合わせて全体で3点ほどしか確認されていないこと、さらにこの埴輪が出土した後円部内堀際では埴輪の細片のみがまとまって出土していることを勘案すると、やはり方形窓を有する個体破片は二次的な移動によって混入した可能性が大きいとみるべきであろう。埼玉古墳群では、昭和初期に大型墳の墳丘を除き一面にわたり大規模な土取り工事が施工されて水田化が進められた経緯があり、その際に多量に埴輪が移動したことが窺える。また愛宕山古墳に隣接して江戸時代には寺院が建立され、古墳の東側はその門前にあたり現在でも住宅が密集している地点であり、後世にたびたび整地されたことが窺えるのである。愛宕山古墳における埴輪片の混在は、こうした状況を反映したものであろう。

以上の年代観に従えば、埼玉古墳群の形成は、二子山古墳と丸墓山古墳の間で先後関係が確定しない部分があるが、およそ須恵器の型式に換算すると稻荷山古墳(TK23～47型式期)から開始され、二子山古墳(TK47～MT15型式期古段階)、丸墓山古墳(TK47型式～MT15型式期古段階)、瓦塚古墳(MT15型式期新相～TK10型式期段階)、奥の山古墳(TK10型式期新段階)、愛宕山古墳(TK10型式期新段階前後)、將軍山古墳(TK43型式期古相)、鉄砲山古墳(TK43型式期)、中の山古墳(TK209型式期古段階)、戸場口山古墳と浅間山古墳(TK209型式期中段階以降)の順で築造されたものとみられる。

埼玉古墳群では、出土遺物からみる限り各々僅かな時間差を持つつ各古墳が継起しているが、その時間差は必ずしも均等ではない。奥の山古墳、愛宕山古墳、將軍山古墳、鉄砲山古墳の4基の古墳が造営されたTK10型式期新段階～TK43型式期段階は、前後の古墳と比較してもかなり近い時間幅の中で古墳が相次いで築造された時期にあたる。後述するように二重周堀の形状から奥の山古墳と鉄砲山古墳の造営時期には重複していた期間が存在していたらしいことからもその想定を傍証している。また、これらはあくまでも各古墳が築造された時間順を示すもので、そのまま首長墓の系列を示すものではないことはいうまでもない⁽¹⁶⁾。

2 古墳の形態的特徴

最近の確認調査の結果、埼玉古墳群ではこれまで古墳群中の前方後円墳で唯一の盾形一重周堀とみなされていた奥の山古墳について他の大型墳と同様に方形の二重周堀であることが確認された⁽¹⁷⁾。その結果、8基の前方後円墳及び方墳である戸場口山古墳の9基の古墳の全てで方形二重周堀という同一企画性を有することが判明した。このような方形二重周堀以外にもこれまでの確認調査の結果によって、いくつかの構造上の特徴や共通性が明らかにされている。とりわけ、墳丘及び中堤の造出しあは県内においても埼玉古墳群内の古墳にしか存在せず、この古墳群を特徴づける最大の要素といってよい。

埼玉古墳群の各古墳の造出しについては既に詳細な検討が行われているが(高橋2005)、後に述べるように、造出しが古墳の構造や配置を規定する上で深く関わっていると考えるので、改めてここで検討を加えることとした。

(1) 墳丘の造出し

埼玉古墳群の8基の前方後円墳のうち稻荷山古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・鉄砲山古墳・将军山古墳の6古墳において、墳丘の一方に造出しが付設されている⁽¹⁸⁾。残り2基の前方後円墳のうち、愛宕山古墳については造出し付近の調査が未了であるが、現地形でみる限り造出しの明確な痕跡は認められない。中の山古墳においてもトレンチ調査では造出しの遺構は検出されていない。ただし、この古墳では調査範囲が限定的であり、トレンチ調査では墳丘括れ部において須恵器片が比較的まとまって検出していることから、その付近に何らかの施設が存在した可能性は排除しきれない。

また、各古墳の造出しの設置場所は、南北方向を墳丘の主軸方位とみた場合、その西側に限られており⁽¹⁹⁾、墳丘の東側や両側に造出しを有するものは現在までのところ確認されていない。さらに稻荷山古墳・奥の山古墳・将军山古墳の3古墳の造出しは一般に造出しが付設される括れ部もしくは括れ部に近い前方部側ではなく後円部に作出されている。こうした特徴を有する造出しの状況をさらに詳しく検討してみよう。

稻荷山古墳では、後円部西側のやや前方部寄りに造出しが付設されている。後円部に造出しを付設する事例は類例が極めて少なく、この古墳群の特徴のひとつとなっている。稻荷山古墳の造出し部分は後世の根切り溝等による搅乱が著しいがおおよその形態が判明しており、それによれば墳丘側で幅14m、先端部の幅が17m、奥行10m程の扇形を呈し墳丘から内堀に向かって緩く傾斜している。造出し上面は既に削平されていたが造出しの基部隅にあたる堀底から須恵器や埴輪が出土した。出土した埴輪には人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪の細片も僅かに含まれるが、報告にあるとおり他からの流入の可能性が大きく、本来この造出しには人物埴輪や馬形埴輪は樹立されてはいなかったとみられる。

二子山古墳の造出しは、括れ部に近い前方部側に設置されている。部分的な調査で全体は確認されていないが、推定で幅20m、奥行9m前後で、周辺の周堀内から円筒埴輪や須恵器大甕、大型器台の脚部片等が出土しており、本来は造出し上に置かれていた可能性が大きい一方で、やはり稻荷山古墳同様に造出し周辺で形象埴輪の出土は認められない。

瓦塚古墳では、古墳の西側で前方部の括れ部に近い辺に造出しを設けている。調査の結果、幅8m、奥行6.5mの隅丸方形で、造出し上及び造出しの北側の周堀内から甕、器台、高坏、提瓶等多数の須恵器や土師器坏が出土し、接合関係から本来は造出し上に据え置かれていたものと推測されている。やはりここでも形象埴輪は確認されていない。

奥の山古墳は、近年再調査された際に稻荷山古墳同様に後円部に造出しが付設されており、その付近から大型器台や器台に乗る子持装飾付壇、壺、高坏などの須恵器が集中して出土した。

将军山古墳でも奥の山古墳同様に後円部に造出しが付設されている。推定で墳丘側幅11.5m、先端部幅14m、奥行12m前後の扇形で、北隅も前面内堀が中堤に向かって周囲の内堀と比較して高まっていることから土橋状の進入路(渡り堤)があった可能性もある。造出し斜面から円筒埴輪と鞍などの器材埴輪が出土しており、土器類は造出し上面及び周辺の堀底から須恵器の壺、甕、提瓶、壇、土師器の坏が出土している。特に須恵器の壇は造出しと墳丘の付け根付近の堀底に4個体まとまって検出されたことから、これらの壇は造出しの上面ではなく本来この位置

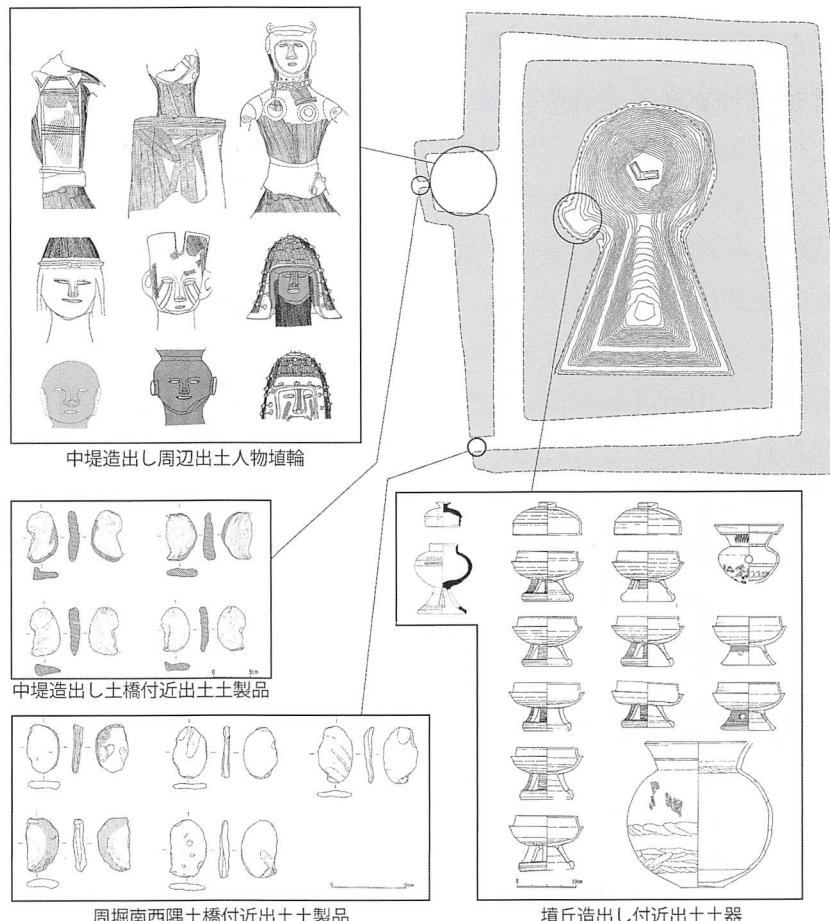
に置かれていた可能性もある。近年、古墳造出し脇から導水施設を模した埴輪や船形埴輪など水と関わりの深い遺物が出土する事例が増加しており、そのことと関連するのかもしれない。

造出しについて各古墳に共通するのは、稻荷山古墳の土橋入口部を除けば、墳丘造出し以外からはほとんど土器類が出土しないことである。このような状況から、埼玉古墳群の各古墳では、墳丘の造出し上において須恵器や土師器の壺、高壺、甌等の飲食器を中心に、大型の器台や壺、甌、さらに装飾付土器等によって構成された土器を使用した儀礼が造出しに集中して挙行されているのである。しかもそこに樹立された埴輪は円筒埴輪及び盾形・韌形等の器材埴輪類に限定されていて、人物埴輪や馬形埴輪等が樹立されていた積極的な状況は認められないことがわかる。

(2) 中堤帯の造出し

稻荷山古墳・二子山古墳・将軍山古墳の3古墳では、墳丘の造出しと別に中堤の一角に外堀に向けて張出部を設けている。それらは中堤造出しあるいは方形区画、中堤張り出し、外区などさまざまに呼称されているが、二子山古墳と将軍山古墳では墳丘の造出しと相似形を呈しており、これを造出しの一種とみなして差し支えないであろう。ここでは調査報告書に従い中堤造出しと呼称しておく。

稻荷山古墳では、中堤の西側で後円部に近い個所に $26m \times 26m$ の方形区画が外堀に向かって張り出していた。この張り出しのため外堀は方形区画を巡るようにクランク状に外側に回り込み、さらに造出し前面の中央付近で外側と繋がる通路となる土橋が取り付けられている。調査の結果、この方形区画の上面は既にかなり削平されていたものの、区画の周囲の外堀には転落した状態で人物埴輪が多数出土し、区画内には人物埴輪を中心とした形象埴輪が樹立されていたことが判明している。その一方で、稻荷山古墳ではこの場所以外では墳丘覆土中などから人物埴輪は細片が断片的に出土しているのみで、まとまって人物埴輪を樹立していた痕跡は認められない。従って、この中堤造出しは人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪を樹立するため特に設えた施設と考えられる。



第2図 稲荷山古墳

えてよいであろう。稻荷山古墳では、中堤造出しから土器類の出土がほとんどみられないことからすれば、人物埴輪を中心とした形象埴輪による祭儀と土器や土製品によるそれが別々の場所に用意されていた公算が大きい。なお、この古墳では古墳の進入口に当たる中堤造出し前面の土橋付近と前方部西南隅の土橋付近の2か所から餅状の土製品が土師器片とともに検出されており、本来は土器に盛られて置かれたものと推測されている。これらは古墳の進入部における何らかの祭儀の痕跡であり、古墳における祭儀全体の一部を構成するものではあっても、その内容は中堤上の埴輪儀礼や造出しにおけるそれとは一線を画するものであろう。また、後円部東南側の内堀隅においても土師器の高壺や壺がまとまって検出されており、土器等を用いた祭儀の跡が確認されている(第2図)。

このようにみると、稻荷山古墳で挙行された祭儀の痕跡は、なお不明な点が多いものの、墳丘造り出し部における須恵器を中心とした供献儀礼、中堤造出しを舞台とした人物埴輪等による儀礼、土橋部における食物形土製品の供献儀礼、周堀隅における土師器飲食器を用いた儀礼、というようにそれぞれ地点と内容が異なる儀礼が存在したとみることができる。

二子山古墳では、中堤西側に西向きに外堀に突出するように中堤側幅30m、先端部幅40m、奥行25mほどの台形の区画を設け、造出しの先端部の外堀は細く掘り残して土橋としている。この古墳では稻荷山古墳のように外堀がクランク上に回り込むかわりにこの部分の堀幅全体を押し広げて外堀の中に造出しを収めている。そのため、二子山古墳の外堀は他の二重堀の古墳と比較しても突出して幅広となっている。中堤造出しは形状を確認するトレンチ調査のみしか行われておらず全面を確認したわけではないが、人物埴輪や馬形埴輪の大半は中堤造出しの斜面から堀底にかけて検出されており、二子山古墳においても稻荷山古墳と同様に中堤造出しは埴輪列を樹立するために設けられた施設であることがわかる。

将軍山古墳では、後円部の造出しと相似形の台形区画が中堤から西側の外堀に突き出すよう作出されている。外堀は突出部を回り込まず、造出しの側線に沿って外側に突出するだけで、造出し前面は外堀の外側と完全につながっている。埴輪は、円筒埴輪を含めて古墳全体でみても中堤造出し付近に集中して出土しており、特に形象埴輪では盾を持つ人物埴輪などがほぼこの付近に限られている。この古墳では中堤造出しの前面に外堀が回り込まないにも関わらず、造出しの10mほど南側に土橋が別に付けられており、中堤への出入りと造出し区画が機能上区別されていたとみられる。

これら中堤造出しが設けられた3古墳以外では、瓦塚古墳の西側の中堤中程で中堤と外堀とつなぐ土橋が設けられており、土橋南側の中堤上で形象埴輪列が良好な状態で検出されている。これらの形象埴輪列は中堤の幅全体ではなく、外堀際にまとまって樹立されていたことが調査の結果判明しており、近年調査された大阪府の今城塚古墳における古墳側面の中堤に外堀に面して帯状に張り出しを設け、そこに列状に形象埴輪列を設置している事例から類推して、瓦塚古墳の事例は今城塚古墳のような構造を簡略化したものとみなすことができる。このような中堤上の外側に寄せて埴輪を配置する行為は、外部からの埴輪の視認性と無関係ではないであろう。島状や出島状遺構に形象埴輪を並べることも、埴輪を外部にみせるための工夫としてとらえられている(森田克行2008)。そうだとすれば、先述の3古墳にみられる中堤に外側に向けて突出した区画を設け、そこに形象埴輪群を集中して配置している状況もまた同様に、外部か

らの視認性を意図したものととらえてよいであろう。

瓦塚古墳では墳丘西側造出し周辺から集中して須恵器が出土しており、中堤造出しの有無にかかわらず西側に向けて埴輪儀礼と須恵器・土師器の儀礼が同一方位に重なるように設置されていることがみてとれる。また、外堀に設けられた土橋も墳丘造出しの延長上に位置している。従って、稻荷山古墳と比較すれば、中堤に突出した造出しを設けるか否かの違いはあっても、各古墳は埴輪配置に関して同じ意識を共有し、同様の祭儀を挙行していたとすることができるであろう。後出する将軍山古墳においても、後円部造出しや中堤造出しをみる限り忠実に稻荷山古墳を継承していることからすれば、この古墳群においては最初の稻荷山古墳で執行されたある一定の型の儀礼をその後の古墳においても踏襲し続けていたことが窺えるのである。

なお、中堤帯造出しの存在が未調査の鉄砲山古墳を含め、このような施設は埼玉古墳群中でも全長100m級の大型墳のみに認められるものであることから、こうした施設について首長権を継承した古墳に限定されたものとする見解がある(高橋2005)。けれども、周辺他地域の100mを超えるような二重周堀を備えた大型墳に今のところこうした中堤造出しが現在のところまったく認められないことからすれば、むしろ埼玉古墳群の個性として理解することが適当であろう。

(3) 造出しのもつ機能

土器類を供献したり埴輪列の樹立される場としての造出しの具体的な機能は、どのようなものと推測することができるのであろうか。

造出しは、一般に古墳の祭儀を執行する場として創出されたものと理解されており(上田1951)、最近では、墳頂の埋葬主体部に至る墓道上に設置された墳丘出入口部における祭祀の場として把握されている(和田1996)。

近年調査された兵庫県加古川市の行者塚古墳では、前方部とは別に後円部に4つもの方形～扇形の突出部が作出されており、造出しの機能に関わる重要な情報が提供された。すなわち、括れ部に設けられた造出し上には、土器類とともに魚・鳥・餅・アケビ・ヒシの実と推定される供物を模した土製品、そして家形埴輪が原位置のわかる状態で検出されたのである(加古川1997)。このような状況を踏まえ、造出し上の祭儀の具体的な内容について、古墳の墳頂部における埋葬施設の周囲に設置される方形区画の埴輪列の成立を契機に、そこで執行されていた現世の人々が加わる飲食としての守魂・鎮魂儀礼と死者のための飲食物供献儀礼とが分離し、後者が墳頂部から離れて括れ部に造出しに移動したものとする見解が小浜成氏によって示されている⁽²⁰⁾。中井正幸氏も墳頂部から土師器高壺や小型丸底壺とともに筒形土器や食物形土製品が出土している昼飯大塚古墳と行者塚古墳の比較検討から、「もともと後円部で行われていた性格の異なる儀礼が、5世紀前半を境に造り出しへの儀礼と場を移すことが推測できる」と述べ、埋葬観念の変化を背景に墳頂部における複合的な葬送儀礼が分離したことを見定している(中井2005)。

一方、場所を異にする墓上儀礼と墓前儀礼の分離は認めつつも、両者の具体的な関係は不明であるとし、「出土遺物から見る限り両者は食物供献を中心とした内容のもの」で、共飲・共食儀礼というよりも死者の靈魂に対する奉納的な儀礼とみる見解や(和田2009)、造出し上の飲食物供献儀礼は禁忌の場とする意識の顕在化によって墳丘上に立ち入ることが困難になったこと

に対する代替機能とみる考え方もある(高橋2005)。このように墳頂部の儀礼の分離なのか移動なのか、あるいは共飲・共食儀礼か否かといった解釈上の論点はあるものの、いずれにしても造出しへは葬送儀礼のうちでも飲食物供献儀礼を執行する場所として新たに創出されたものという点では異論はないであろう⁽²¹⁾。奈良県島の山古墳では、後円部と造出しが接する地点から植物性の編み籠が4点並んで出土しており、実際の食物を供献する儀礼が原型として存在した可能性を示している。埼玉古墳群についても、各古墳から出土している土器の分析を通じて、同様に墳丘の造出しで飲食物供献儀礼が執り行われたことが想定されている(高橋2005、杉崎2009)。

行者塚古墳の造出しについては、出土した家形埴輪群の様相から現実の居館を意識した配列となっているという見解があり(若狭2007)、造出しと墳丘の間隙の谷部分に導水祭祀施設が設置されている状況からもその可能性は大きいが、しかしながら造出し自体は豪族居館の復元それ自体の明示を主たる目的としたものではないことは家形埴輪に各種食物形土製品が伴っていることからも明らかであろう。高橋一夫氏も豪族居館の表示説を排し、造出し上の儀礼については他界思想の出現にその契機を求めている(高橋2005)。筆者も家形埴輪がまず墳頂部に出現し、後に造出し上に移動すること、埴輪の出入口の扉がいざれもあけ放たれていることから、やはり家形埴輪自体は被葬者の靈の依り代とみなすことが妥当であると考え、さらに造出し上では墳丘に向かって奥に家形埴輪群が置かれその手前に飲食器や供物としての食物形土製品が並べられているという両者の配置関係から類推すれば家形埴輪と土製品には、靈前における奉納的な関係が成立する余地は大きく、家形埴輪もまた単に居館を復元したものとみるよりも供献儀礼の一部を構成するものとみる。そして、ここで執り行われる儀礼は、その配置からみて墳丘を背にして前方を正面とし、祭儀に参列する人々は造出しの前面に位置して古墳と相対していたとみるのが自然であろう。

ところが、造出しの正面観についてはまったく異なる見解も提示されている。三重県宝塚1号墳の造出し上及び周辺の形象埴輪の検討をもとに松田度氏は造出し脇の埴輪群では壺形埴輪列のくい違部が墳丘側に向けられていることやヒレ飾りのある入母屋高床の家型埴輪の出入り口の表現も墳丘側に存在していること、さらに兵庫県行者塚古墳や奈良県乙女山古墳、大阪府の心合寺山古墳においても同様の埴輪配置にみるくい違部の構造が認められることなどを根拠に「当該時期の古墳の造り出しあとは、被葬者側が正面となる場」であり、造出し部の形象埴輪群も墳丘側を正面観としていたとする、本論と相反した解釈を提示している(松田2007)。しかしながら、埴輪の出入口の方向が必ずしも他の遺物群を含めた全体の正面観を示すものとみるのは早計であろう。宝塚1号墳等で認められた形象埴輪の配置状況や家形埴輪の扉の方向は、墳裾に造出しを設けることによって生じた墳頂部と墳裾の造出しとの空間を繋ぐ、いわば靈魂の通路を示すものと考えるのが妥当であり、古墳の内と外という関係においては、家形埴輪と供献された食物形土製品の位置関係からこれを祭壇的様相と理解して良ければ、現世の人々が関わる飲食物供献儀礼の正面観としては、やはり造出し前面が正面であることを明示しているとみるべきである。

一般に、前方後円墳における前方部は「墳丘墓における葬送祭祀の場として重要な意義をもつた墓道部分が特殊に発達を遂げた祭場」(都出1992)に由来するとすれば、本来の前方後円墳の正面は前方部前面であったことは疑いないであろう。やがて、前方部の発達とともに前方部隅角

が後円部の埋葬主体へ通じる墓道として位置づけられるようになったことで(近藤2000)、早い段階から前方部前面と正面とする観念が薄れていったことが窺える。古墳時代前期前半に位置づけられる奈良県西殿塚古墳では墳丘を盆地側に向けて築造されており、隣接する東殿塚古墳では、前方部側面の裾部分に造出し状の張り出しを設け、鰐付円筒埴輪や土器類が集中して配されていることが確認されている。その位置は前方部側面とはいえかなり前方部前面寄りであることから、直接後円部の埋葬主体に対応するものかどうかはなお明確ではないが、このような事例から少なくとも前方後円墳の創出の早い段階から前方部前面を正面としない古墳が存在したこともまた確かなことであろう。

古墳正面観の変化については、前方部の発達とともに側面形としてのふたつの高まりが強く意識され側面が古墳の正面と認識されるに至り、その中心の括れ部が正面観の中心として意識されるようになったとする見解もあり、傾聴すべきであると考える(吉村1999)。

ただししかし、古墳時代前期では丘陵等の裾部に立地する古墳で前方部を平野側に向いている古墳も多いことから、前方後円墳の正面観については前期前半段階ではなお錯綜状態にあり、それが収斂して前方後円墳の側面を正面観とする意識が定着するのは、前期末の造出しが創出された時期になってからではないかと推測する。古墳時代前期後半には、交通網や物流の結節点となる「津」や「市」などを見下ろす地点に景観の構築を主眼に置いて前方後円墳が築造されるようになるという指摘があり(北條2010)、この時期に古墳の景観に対する観念が大きく変化しつつあることが窺えるからである。

造出し出現期の古墳であり、括れ部や前方部側面ではなく後円部に造出しを備えた三重県石山古墳では、造出しのある墳丘の南西側のみに主墳丘の段築に追加する形で基底基壇が作出されており、この基底基壇が作出された側が古墳の正面とみなされていることは(穂積2005)、造出し創出時における造出しと古墳の正面観の関係に重要な示唆を与えるものであろう。

埼玉古墳群では外周から中堤への進入路である土橋が全て造出しと同じ西側に設けられ、なつかつ造出しに近接して設置されている事例が多い点も、造出しが設置された方向を古墳の正面とする見方を補強するものであろう。

つまり、初期の造出しの状況を勘案すれば、造出しこそはその当初から古墳そのものの正面観と密接な関係にあり、定形化した古墳の成立による前方部の発達とともに前方部における祭場や墓道としての機能や意識が喪失し、さらに墳頂の祭儀の全部もしくは一部が古墳の墳裾の埋葬施設登坂路入口に移行してゆく過程の中で、古墳の景観に対する観念の変化と相俟って、新たに墳丘出入口部分に古墳の正面を示しつつ葬送儀礼を執行する場として創出されたものとみなすことができる。

造出しこそは、創出段階では片側のみに設けられているが時代が下がると両側に設けた古墳が出現する。両側造出しこそは特に大王墓と想定されるような大型墳に認められることが多い。造出しが設置された側を古墳の正面とした場合、括れ部の両側に造出しが設けられた古墳では両側とともに正面として機能していたのであろうか、といった疑問が生じる。その点について、和歌山県井辺八幡山古墳は極めて示唆的である(松田2010)。この古墳では括れ部の両側に造出しが設けられており、原位置を保った状態で多数の形象埴輪が検出されたが、西側造出しおよび埴輪群では向き合う中心人物以外は全て外側を向いているのに対して、東側造出しおよび埴輪群は概

ね墳丘側を向いている。また東西の造出しの埴輪群は異なったグループで構成され全体としてひとつの群を成しており、その主題となる場面が西側造出し上の対面する人物群であることを勘案すると、やはりこの古墳では西側を古墳の正面とみるのが妥当であろう。このように両側に造出しを有する古墳においても、そこにおける埴輪配置は線対象を示していないものが多く、従って両者は等質ではなく、古墳の側面観が重視されたとしても埋葬主体部への進入を考慮すれば古墳の両側がともに正面であったとは考え難いのである。

井辺八幡山古墳のように造出しに形象埴輪が樹立されている事例も多いが、初期の人物埴輪が出現する大山古墳(伝仁徳天皇陵古墳)や太田茶臼山古墳など5世紀中葉を前後する頃の古墳では、人物埴輪は中堤上に樹立されていたと推測されており(小浜2007)、それに先立つ5世紀初頭頃の造出しの出現期に中堤上において人物埴輪群像を樹立する堤上儀礼も成立したとみる見解は妥当であろう⁽²²⁾。このような造出しの在り方は、人物埴輪を含む一群の群像と供獻土器とは一連の繋がりのある葬送に関わる祭儀を構成していたとしても、本来その設置・執行場所は異なっていたということを示すものであろう。

稻荷山古墳等にみられる、後円部の造出しに須恵器や土師器等の飲食器と甕を置き、中堤に方形区画を作出して形象埴輪樹立の場とする構造は、中堤から外側に突出する方形区画の有無を別とすれば、まさに畿内中枢の大王墓で施行された葬送祭儀の在り方をモデルとしてそれを踏襲したものであり、埼玉古墳群で横穴式石室を導入した6世紀後半頃の將軍山古墳においてもなお、飲食物供獻儀礼と人物埴輪群像による儀礼とが墳丘と中堤のふたつの造出しに明確に分離されていることに着目すれば、この古墳群では稻荷山古墳以来の祭儀の伝統が強固なまでに連綿と踏襲されていたといわざるを得ない。このことは埼玉古墳群の性格を規定する重要な指標となるものであろう。

3 古墳の正面観と築造の原理

(1) 古墳の正面観

造出しが、本来飲食物供獻儀礼を執行する場所として創出され、その位置は前方部に替って古墳全体の正面を示す方向に付設されたことを確認したが、注目すべき点はこれまでみてきたように、埼玉古墳群の各古墳ではそうした墳丘造出しが全て古墳の西側の一方のみに付設され、さらに人物埴輪を集中的に樹立するために造られた中堤造出しの位置も墳丘造出しの方向と一致しているという点である。中堤造出しを設けていない瓦塚古墳においても形象埴輪列が墳丘西側の中堤上に確認されており、しかも先に述べたようにこの埴輪列は中堤上中央部ではなく外堀際に寄せて配列され、埴輪配置に際して外部からの視認性が強く意識されていた公算が大きいことからみれば、中堤造出しの有無にかかわらず、この古墳群では西側からの眺望が強く意識されていたことがわかる。

また、遺骸を納めた棺を搬入するための墓道に使用されたと推測される外堀から中堤への土橋についても、稻荷山古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・將軍山古墳では全て西側だけに設置されており現在までのところ東側には確認されていない。さらに、周堀をみると二子山古墳の外堀の東辺の長さが約220mに対して西辺の長さは約250mと30mほど長く、西側の堀が東側よりも明らかに幅広く長大に掘り込まれていることが判明している。瓦塚古墳でもコーナー部の確認

が未了であるが、南北方向の外堀の傾きを見ると西辺の長さが二子山古墳同様に東辺と比べ相対的に長くなりそうである⁽²³⁾。均整のとれた墳丘に比べて周堀や中堤が大きく歪められた理由を繩張りの杜撰さといった土木技術力の不足に求めるることは適當ではなく、こうした周堀形態の不均整もまた何らかの理由にもとづいて意図的に造作されたものとみるのが妥当であろう。西側の堀幅を幅広く長大にすることは周堀の均整さを損なう一方で、西側方向から見た場合の古墳の莊厳さを増幅することに貢献したに違いない。二子山古墳の周堀の変形については、付近に所在する小円墳を意識的に避けたためとする見方もあるが(杉崎1987)、先行する小円墳を避けるのであればあらかじめ全体の繩張りを南に移行すれば解決する問題であり、その時点で二子山古墳の南側は大きな空間地であった。従って、多大な労力を用いて堀幅を歪める必然性に乏しく、やはり小円墳の存在は周堀の形態とは直接の因果関係はなく大形墳それ自体の問題であると考える。

このように、埼玉古墳群では構造の判明しているいすれの古墳においても祭儀を挙行する造出しや墓道となったであろう土橋、形象埴輪列など葬送儀礼に関わる一連の諸機能・施設が各古墳の西側に集約して設えていることに加え、周堀の形状などにも西方向を強く意識している様相が窺える。このような諸状況の示すところは、これらの古墳が西側からの眺望を明確に意識し、西側を古墳の正面とする観念に支えられて築造されたものと理解することがもっとも合理的な解釈であろう⁽²⁴⁾。重要な点は、西側に古墳の正面を向けて築造するという観念が、最初に築造された稻荷山古墳から鉄砲山古墳に至るまで連綿と遵守されていることであり、後に述べるように調査データの少ない中の山古墳や墳形の異なる丸墓山古墳や戸場口山古墳もおそらく同じ観念が共有されていたと考えられることである。

また、このような傾向は大型墳に限らない。埼玉古墳群では、稻荷山古墳と二子山古墳の間に小円墳が10基ほど所在しているが、調査された古墳の周溝には陸橋を有するものが多く、それらもまた基本的に西～南方向に設置されており(白井1983)、西側と正面とする観念や意識の共有化は小円墳の造営にまで及んでいた。

この古墳群で埋葬主体部として最初に横穴式石室を導入したのは、TK43型式期古段階墳の築造と考えられる將軍山古墳であり、群馬県などの東国の先進的な地域よりもほぼ半世紀ほど遅れている。一般に古墳に横穴式石室が導入されると、石室の入口を南側に向ける傾向が強まることから、必然的に古墳の主軸は東西方向となることが明らかにされている(吉井2010)。しかしながら、將軍山古墳では新たに横穴式石室を導入してもなお古墳の主軸方位はやや東西に振るだけで完全な東西方向に向かわずに、それまでの古墳と近似する方位を採用している。坂本和俊氏は、將軍山古墳の主軸方位が他の前方後円墳よりもやや東に振れている理由について、「横穴式石室の開口方向を南に向けることと墳丘主軸と石室主軸をほぼ直交させることを両立させるため」(坂本1996)ととらえており妥当な見解であると考える。

このことは、先の造出しの取り付け方位の問題を含め、この古墳群では石室方位一般の規範よりも古墳の西側を正面觀とする伝統的な観念のほうがなお勝っていたということを端的に示しているといってよいであろう。

(2) 古墳群周辺の地形

西側を正面觀として南北方向に主軸を据えて築造されている埼玉古墳群の古墳配列は、古墳群周辺の地形とどのような関係性を有するのであろうか。次に埼玉古墳群の周辺地形を確認してみよう。

埼玉古墳群周辺の地形環境については近年に詳細な分析がなされており(杉崎2004・井上2007)、また最近の継続的な範囲確認調査によって新知見も得られているので、それらを参考に以下検討する。

埼玉古墳群が乗る台地は、現在では荒川と吉利根川の挟まれて県北の行田市付近から県南の川口市までのレンズ状を呈する独立した台地であり、大宮台地と呼称されている。大宮台地は、本来は館林方面から南に向かって伸びた大きな舌状の台地が利根川の浸食作用といわゆる関東造盆地運動によって館林台地と切り離されたもので、台地内部は北側から東側にかけての沈降が著しいため多くの独立した支台に分離している。埼玉古墳群はこの大宮台地の北端に位置する仮称埼玉台地と呼ばれる小さな独立した台地の北端に立地している(杉崎2004)。

平成18年度から開始された史跡さきたま史跡の博物館による埼玉古墳群の範囲確認調査は、周辺の地形について多くの新知見をもたらした。

まず、古墳群の最も南に位置する奥の山古墳の南側は、平成18年度に行われた確認調査によつて、ローム層が深く落ち込んだ低地となっていることが判明しており、古墳群西側の低地が奥の山古墳の南側に回り込んでいることがわかる。奥の山古墳の前方部外堀際にこの台地の稜線があり、奥の山古墳の外堀の一部は台地の縁から低地へ落ちている可能性もある。この稜線はそのまま南へと続き、樋上地区と埼玉台地を区画している。奥の山古墳のさらに南側地点には、江戸時代の古記録によれば小円墳群が一直線上に並んでいることから台地の連続を推測させるが、現在の知見ではその地点は低地を挟んだ自然堤防上に位置し、埼玉台地とは明確に区別されるものである。また、これらの小古墳についても古墳がどうかの確証も得られていない(杉崎2007)。

稻荷山古墳の北側には現在、旧忍川が流れている。この河川は江戸時代享保年間の開削による人工の堀割といわれているが、稻荷山古墳の東側で北に向かって開く谷状地形が確認されたことや対岸の万願台地側でも北から南の忍川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈することが確認されているので、旧忍川の付近は既に古墳時代当時から谷状地形が形成されていて北東の万願台地との間は区画されていたことが窺える。旧忍川が江戸時代に開削されたことが事実であるとすれば本来あった谷状の地点をさらに拡幅して掘割としたのであろう。この谷状地形を境界として、埼玉古墳群は白山神社古墳など北側の古墳群とは区画されている。

丸墓山古墳の西側は、平成20年度に確認調査が実施され、古墳西側の周堀の立ち上がりが明確には確認されずもともと低地部であったことが判明した。天正18年(1590)に石田三成が忍城攻めを行った際に水攻めのために湛水用の土壠を忍城の周囲に構築しており、それらは俗に石田堤と呼称されているが、その土壠は丸墓山古墳のほぼ南北方向の中軸線上に取り付き、古墳から南に向かって伸びる土壠の痕跡が現在も高まりとして残存している。土壠は湛水の性格上、台地の縁辺に沿って構築されたと考えられるので、石田堤の構築された位置を台地の端部とすると丸墓山古墳のほぼ半分は台地から低地に落ちている可能性が大きい。

瓦塚古墳の西側で、現在さきたま史跡の博物館が設置されている地点は、昭和55年頃に浄化槽が設置された際に掘削され、2m以下までローム層が検出されなかつたことからもともと低地であったことが判明している。従って、博物館と台地上に位置する瓦塚古墳の間に台地縁辺の稜線が存在することになり、瓦塚古墳はかなり台地の際近くに立地していることになる。

愛宕山古墳の西側の古墳公園新駐車場付近は、造成に伴う確認調査が実施され、全面低地であったことが確認されており、新駐車場と愛宕山古墳の間にある旧駐車場の付近に台地の稜線が存在することが想定できる。愛宕山古墳の西側の外堀の位置は不明確であるが、石田堤の延長線を考えると、かなり台地縁辺に近いところに位置していることが予想される。

一方、古墳群の東側では、前玉神社の北東側には小さい谷が入り込み、付近に谷頭部が所在した可能性が大きい。埼玉古墳群の南方には、利田と呼ばれる付近から大きな谷が南から北へ屈曲しながら入り込んでいることがわかる。その谷頭部がどの付近に到達しているのかこれまで明確でなかったが、鉄砲山古墳前方部と奥の山古墳後円部の間には外堀にかかるように小さな谷頭部が確認されたことから、前玉神社の北東側には小さい谷が前玉神社の東側を回り込んでここまで伸びているのかもしれない。

また、将軍山古墳の東側には目立たないが南北に小さな細い谷筋が入り込んでいる。トレーニング調査のため詳細は不明であるが旧忍川に向かって開析する谷筋の可能性がある。

二子山古墳の東側には、伝承では「シャングリ」山古墳と呼ばれる円墳が所在したとされるが、範囲確認調査の結果では古墳跡は検出されなかつた。従って、この地点は現在では平坦面に見えるが、当時は墓域を区画する何らかの境界が存在していた可能性もある。

戸場口山古墳の東側は現在宅地化が進行していて旧地形が良くわからないが、先に述べた南東側もしくは南側から大きな谷が入り込んでいたようであり、この古墳の東側は東に向かって緩傾斜していたものと思われる。

埼玉古墳群の西側で、佐間地区に所在したとされる前方後円墳である大人塚古墳をどのようにとらえるかということは埼玉古墳群の範囲を考える上で大きな問題である。1997年に行田市教育委員会が佐間字野合地点の試掘調査を実施し、削平された大人塚古墳の周堀と想定される遺構を確認した(門脇1997)。それは従来推定されていた武藏水路の下ではなく、それよりもやや西寄りの地点であった。調査は試掘であり、また古墳は完全に削平されていたため詳細は不明であるが、全長40mほどで東西に主軸を向ける前方後円墳と推定されている。この大人塚古墳は埼玉古墳群と地形的なつながりが認められるであろうか。

この地域周辺では河川の氾濫・浸食と地盤沈降現象が相乗的に作用し、埋没ローム台地の上に自然堤防が形成されているため、遺跡形成時にその場所が自然堤防上であったのか埋没ローム台地上であったのかの判断を困難なものにしている。埼玉古墳群から3kmほど南に位置する築道下遺跡は古墳時代後期初頭頃から集落が形成される自然堤防上に位置する遺跡であるが、奈良・平安期の遺構が砂質シルト層上に形成されているのに対して、古墳時代の遺構はその下のローム層上の暗褐色シルト質土壤が確認面であった(吉田1997)。従って、この地点では古墳時代後期初頭には、河川の開析により切り離された埋没ローム台地の上に既に自然堤防が形成され、その自然堤防上に集落が占拠していることがわかる。さらにまた、この自然堤防の形成はその後も断続的に進行していたことも同時に判明している。築道下遺跡よりも北側で佐間に

隣接する下忍の自然堤防上に位置する鴻池・武良内・高畠遺跡においても、遺構は厚いシルト質の土壤に覆われていた。そのうち古墳時代前期に遡る鴻池遺跡も遺構の確認面はローム層上面であるが、遺構の深度を考慮すればさらにその上のシルト層から掘り込まれている可能性が大きく、ローム台地上ではなく自然堤防上に形成された遺跡とみなすことができる（栗原1977）。このように、佐間の地点の自然堤防では、縄文中期の遺構がローム面から形成されているのに對して、古墳時代初頭の遺跡はローム上に堆積した土壤上から掘り込まれており、従って現在佐間台地や下忍台地と呼ぶ高まりは沈降した台地上に縄文時代中期以降に旧利根川が形成した自然堤防と理解するべきであり⁽²⁵⁾、古墳も当然、自然堤防上に築造されていることになる。

先に述べたように奥の山古墳の西側から南側にかけて埼玉台地の稜線がめぐることを考慮すれば、大人塚古墳は、埼玉台地とは切り離された自然堤防化した微高地上に立地していることになり、埼玉古墳群と近接する位置に立地してはいるものの同古墳群とは区別される古墳とみてよいであろう。

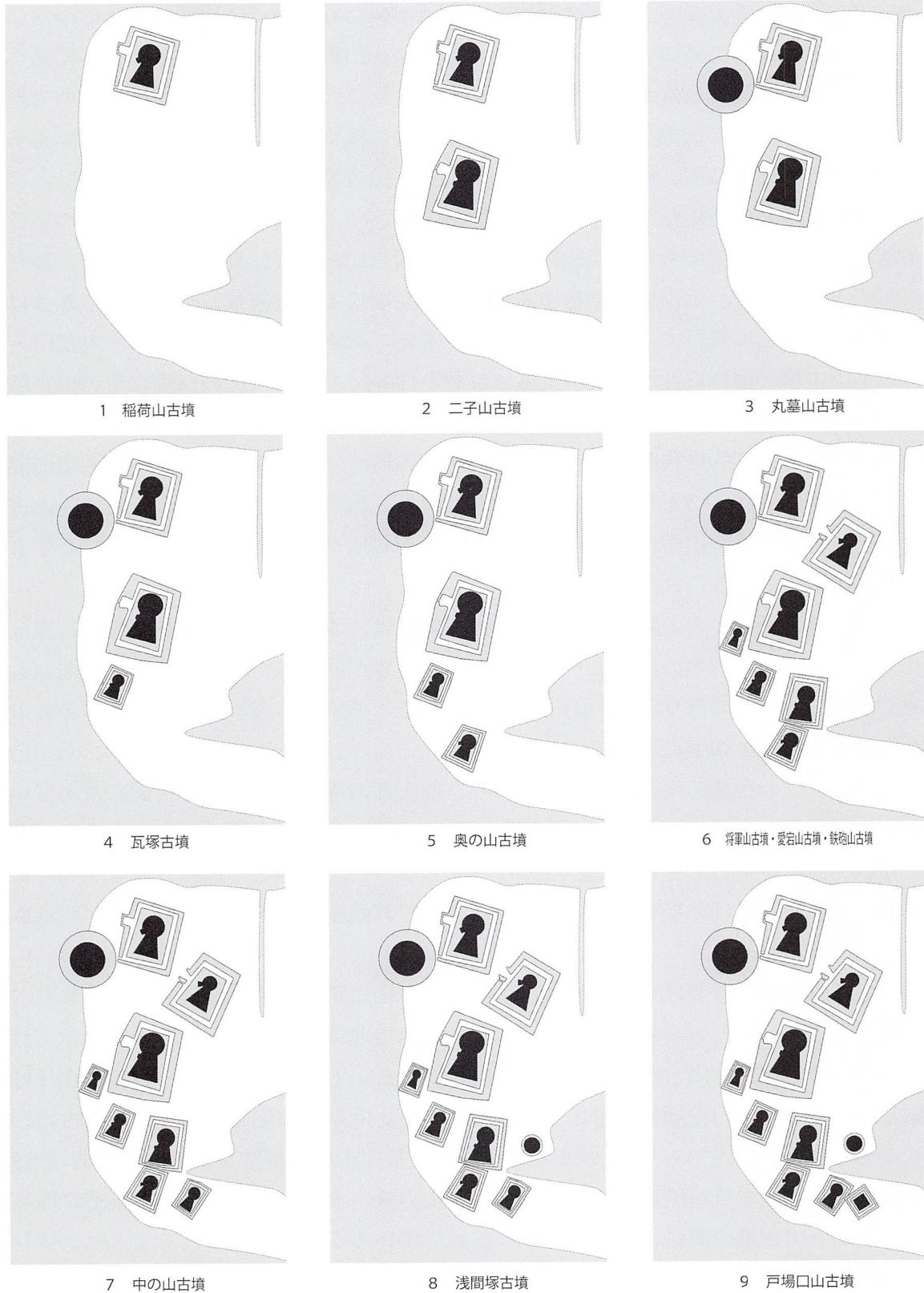
これまで述べたような地形を前提に考えると、埼玉古墳群は、北西側から東南側に低地を望む西側に張り出した半円形の台地で、北側や東側も幾筋かの谷が南北に入り込み、あたかも四方が区画され独立した様相を呈する台地上に立地することを想定することが可能である。自然の谷や低地に囲まれたおよそ南北800m、東西500m程度の範囲が、この古墳群の墓域として認識されていた範囲としてよいであろう。埼玉古墳群の墓域が地形的に独立性が高い点は既に井上尚明が指摘しているとおりである（井上2009）。

杉崎茂樹氏は、古墳群の周辺地形を詳細に検討し、埼玉台地と佐間台地、万願台地、長野台地はおのれの繋がったひとつの台地であり、埼玉台地の西側には三方がそれらの台地によって囲まれた入江状となった地形を想定しており、後に述べるように古墳群の北西側の状況を検討する上で極めて注目すべき見解といえる（杉崎2004）。ただ、筆者は既述したように、佐間台地は比較的早くから沈降し古墳時代には自然堤防化していたこと、また奥の山古墳の南側や稻荷山古墳の北側には谷筋が入り込んでいる状況から判断して、埼玉台地の西側は完全な入江状ではなく、埼玉台地と佐間の自然堤防や万願台地との間には、入江の湛水の逃げ道となった細い水路が存在したのではないかと推測している。

（3）古墳の築造順にみる古墳群の築造原理

埼玉古墳群の各古墳が西側を古墳の正面觀とするという規範に強く規制されて順次築造されていったとして、今述べてきたことを実際に古墳に当てはめ、この台地上における古墳群の形成過程をトレースしてみよう。

埼玉古墳群の中で最初に築造された大型墳は稻荷山古墳である。従って、この地点がこの墓域内で最良の場所であったに違いない。稻荷山古墳が立地する地点は北西側に緩く傾斜する台地の北側の縁辺付近に位置し、西側及び北側に低地を望む場所であり、それらの方向からの眺望性に優れている（第3図1）。この古墳群が立地する台地は先に述べたように緩やかな起伏が認められるものの、総体的には南西から北東方向に向けて緩傾斜しており、一番南に位置する奥の山古墳付近の標高がもっとも高い。それにもかかわらず、台地上で標高が低い位置に当たる北寄りの縁辺に最初の古墳が築造されたということは、標高という地形的な条件以上に南よ



第3図 埼玉古墳群の築造変遷

りも北側のほうが立地優先度の点において勝っていたことを端的に示している。

稻荷山古墳の次に二子山古墳が稻荷山古墳の南側に築造された(第3図2)。稻荷山古墳に後出する二子山古墳が稻荷山古墳の南側に占地していることも、南よりも北側のほうがより優位な地点であったことを示すひとつの証拠となろう。稻荷山古墳の外堀と二子山古墳の外堀は100mほど離れており、外堀を含めて200m級の稻荷山古墳に隣接して、外堀まで含めると250mに

達する古墳を築造してもなお十分に余裕のある距離が保たれている。稻荷山古墳の南側には小円墳が8基ほど密集して築造されており、この地点は小円墳の築造空間だったようである。二子山古墳は小円墳に配慮しながら、その南側に選地したことが窺える。二子山古墳の立地も稻荷山古墳と同様に西側に低地を望む地点であり視認性に優れた場所を占めているといえる。

二子山古墳と相前後して、稻荷山古墳の西側に丸墓山古墳が築造された(第3図3)。二子山古墳に先行して丸墓山古墳が築造された可能性もあり、二子山古墳との先後関係については議論の余地があるが、立地からみた築造優先度という視点でみれば、丸墓山古墳が先に存在した場合、二子山古墳はもっと南側に選地する余地が可能なことを考慮し、立地の視点からは二子山古墳が丸墓山古墳に先行する可能性が大きいと考えておきたい。二子山古墳・丸墓山古墳の次に、二子山古墳の南側に瓦塚古墳が築造され(第3図4)、さらにその南側に奥の山古墳が相次いで築造された(第3図5)。このように古墳の造営する地点は台地の縁辺に沿って時系列に従い北から南へと規則的に移動してゆく。位置的にみると、奥の山古墳と二子山古墳の間に挟まれた瓦塚古墳の東側、つまり奥の山古墳の北側には瓦塚古墳と並列するように奥の山古墳よりも時期的に新しい鉄砲山古墳が所在しており、北から南へと順に選地していくとしたとする北優位の原則と矛盾するかもしれない。

しかしながら、西側からの眺望性という視点で見れば、西の方角からは瓦塚古墳に完全に遮蔽されてしまう鉄砲山古墳の位置よりも西側からの視界が開けている奥の山古墳の地点のほうが立地上優れていたのであり、奥の山古墳が先行してこの位置を占めたことは西側からの眺望が最優先されたことを如実に示している。

奥の山古墳はこの台地の南限に占地しており、前方部の周堀の隅は台地斜面に及んでいる可能性もある。北側から順に西に面して築造してきた古墳も奥の山古墳の築造をもって、西に面してこれ以上古墳を築造できる余地がなくなってしまった。台地上で残る大きな空間地は二子山古墳の北側と南側だけとなり、その2か所にそれぞれ鉄砲山古墳と將軍山古墳が築造された(第3図6)。

奥の山古墳の次に位置づけられる鉄砲山古墳と將軍山古墳の築造時期は近接しており、その先後関係は先に述べたとおり微妙である。ここで述べる北優位の原則が遵守されたとすれば、將軍山古墳のほうが鉄砲山古墳に先行する可能性が大きいと考えておきたい。この点は城倉氏の埴輪分析や岡本氏の円筒埴輪突帯の分析と整合する。問題は鉄砲山古墳と奥の山古墳の周堀が相互に干渉している点であり、このことはこれら3基の古墳の造営が極めて時間的に近接し、一部造営期間が重複する可能性のあることを示している。また、將軍山古墳の築造に際して稻荷山古墳と二子山古墳の間に位置するように占地していることが認められることは、少しでも西からの眺望を得られるように配慮した結果とみることもできる⁽²⁶⁾。

なお、二子山古墳の西側で丸墓山古墳の南側にあたる地点には多少空間地があるようと思えるが、ここには二子山古墳とほぼ同時期に天祥寺裏古墳及び天王塚古墳と呼ばれる径30mほどの円墳が既に築造されているので、新たな古墳を築造する余地は無かった⁽²⁷⁾。將軍山古墳の築造前後に愛宕山古墳も築造された。愛宕山古墳が二子山古墳の西側で眺望の開けた台地縁辺に占地できたのは、埼玉古墳群の前方後円墳の中では最も規模が小さい古墳であり、それが幸いして二子山古墳の西側で天祥寺裏古墳及び天王塚古墳の南側に築造可能な余地が存在したとい

うことであろう。愛宕山古墳の周堀の調査は部分的にしか行われていないが、西側に隣接する現在の駐車場の状況から判断すると古墳の西側の周堀はその一部が低地部に掛っている可能性もあり、台地縁辺際に立地していることが窺える。

将軍山古墳と鉄砲山古墳の築造によって、西に面した土地は完全に無くなつたため、やむを得ず奥の山古墳の西側に中の山古墳が築造された(第3図7)。中の山古墳の造営に際し、将軍山古墳の東側が選定されなかつた理由は、その付近に南北に小さな谷が入り込んでいて、墓域境界となつていたことに加え、この地点は稻荷山古墳・丸墓山古墳・将軍山古墳が重なり、西側からの眺望を完全に遮蔽していたためと推測できる。また、二子山古墳の西側が選地されなかつたことも、二子山古墳が墳丘長138mとこの古墳群中の最大規模で、その東側地点は西側からの眺望性が決定的に劣っていたからであろう。奥の山古墳は、埼玉古墳群中で愛宕山古墳に次ぐ規模の小さい古墳であり、相対的には西側からの眺望性が良い。中の山古墳の築造によつて、この縦列も南の端部に到達してしまつたので、その次の古墳はさらにその東側に移り浅間塚古墳(第3図8)、戸場口山古墳と続いて築造されて、この台地における古墳の築造は終焉を迎えた(第3図9)。浅間塚古墳と戸場口山古墳の先後関係は出土遺物がほとんど知られず明確にはできないが、これまでみてきた北優位の原則に従えば、浅間塚古墳が戸場口山古墳に先行することになろう。戸場口山古墳の外堀が中の山古墳の堀に交錯するほど近接して造営された理由は、古墳の東側の地形がいまひとつ明確ではないが、古墳群の最後の段階においても西側を正面觀とする意識が明確で、極力西側に寄せて古墳を築造しようとする意識が息づいていた可能性も考えられる。このように、埼玉古墳群では古墳の造営を西側からの眺望性という視点から整理すると古墳の配置構成について極めて整合的に理解することができる。

なお、稻荷山古墳の西側で二子山古墳との間に築造されている小円墳群は、おおむね稻荷山古墳～二子山古墳・丸墓山古墳の造営時期に平行して築造されたものであることが調査によつて判明している。そのうち、もっとも西側に位置する梅塚古墳(埼玉2号墳)や埼玉3号墳がTK47型式期頃の築造と想定され相対的に古く、稻荷山古墳とほぼ同時期であるのに比べ、東寄りの埼玉5号墳や6号墳は、それよりもやや新しく二子山古墳に近いMT15型式平行期に下るものである。このことから、小円墳の築造もまた西側が時期的に先行し、時間軸とともに東に造墓地を順次移動しつつ築造されていることがわかる。つまり、埼玉古墳群では大型墳のみならず小円墳まで含めて、西側からの眺望性が貫徹されているとみることができる。

従つて、埼玉古墳群の主軸方位の企画性や古墳立地の密集性は、政治的な支配力を古墳方位の差異によって視覚的に表現しようとした政治的な築造規制というようなものではなく、その実態は今の述べたような地形上の制約のもとに、西側からの眺望を第一義的に、そして次に南よりも北に優位性を有するという選地意識や立地規範が各古墳の造営を通じて一貫して踏襲された結果であると考える⁽²⁸⁾。こうした立地観念に対する造営主体の強いこだわりがこの古墳群の景観的な特徴を際立たせたといつてよい。

さて、問題は古墳群中でも最も西側に位置する丸墓山古墳と愛宕山古墳である。この2基の古墳は埼玉古墳群に通底する東よりも西側、南よりも北側という優先意識からは外れて築造されているのであろうか。愛宕山古墳の選地は、先に述べたように古墳が築造可能な空間地さえ存在すれば、少しでも西側からの展望に優れた地点に築造したいという意識の表れとみるべき

であり、むしろ築造規範の強固さを示すものと解釈するべきであろう。それと同時に愛宕山古墳の規模の小ささも幸いしたとみるべきかもしれない。愛宕山古墳は二子山古墳の西側に位置しつつも、二子山古墳の位置よりもやや南に下がっていることもあり、二子山古墳の眺望にはほとんど影響を及ぼしていない。

しかしながら、丸墓山古墳の場合には、この古墳が築造された稻荷山古墳の西側地点は、推定墳径105m、周堀の外径160mに及ぶ大円墳を築造する空間はまったく存在していなかった。この地点に丸墓山古墳が築造された結果、丸墓山古墳の外堀と稻荷山古墳の西側外堀の間隔は8mほどしかなく、もし外堀の縁に外堤のような何らかの周堤帯が存在したとすれば両古墳はほぼ接するような状況になったに違いない。しかもそれでも丸墓山古墳は台地上にはまったくおさまりきらず、16世紀末に築かれた石田堤の位置から推測すれば、古墳の西側半分は完全に台地斜面から低地にかけて位置している公算が大きい。このように立地的にみると丸墓山古墳は、墓域である台地上からはずれてまで、相当な無理を承知で築造地点をここに選定していることになる。

埼玉古墳群におけるこのような古墳の眺望性に強く固執している意識からみれば、丸墓山古墳は結果的に稻荷山古墳の西方向からの眺望性を大きく遮っている上に、丸墓山古墳の周堀は稻荷山古墳の西側に付設された古墳進入部のひとつである土橋に極めて近接しており、物理的にもそこへの立入を不便なものにしている。

従って、丸墓山古墳の築造主体は稻荷山古墳よりも眺望的に優位な地点に古墳を造営する目的のために劣悪な立地環境を無視しても敢えてこの位置を選択して築造したのではないかと推測することが可能である⁽²⁹⁾。なお、二子山古墳と丸墓山古墳は、先に述べたとおり先後関係は確定的ではなく逆転する可能性もある。仮にそうした場合でも、ここで想定した稻荷山古墳と丸墓山古墳の関係の解釈は変わることはない。むしろ、丸墓山古墳が二子山古墳に先行する場合には、二子山古墳の占地した地点が空間地であったはずであり、そこに丸墓山古墳を築造せずに敢えて現在の地点を選択した理由としてここで述べた仮説を一層補強するものといえる。

以上を整理すると、埼玉古墳群は、第1列 稲荷山古墳、二子山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳、第2列 将軍山古墳、鉄砲山古墳、中の山古墳、第3列 浅間塚古墳、戸場口山古墳、というように基本的には西から東へと展開する3列の配置構成として把握することが可能であり、それぞれの列は北から南へと順に台地の端部の形状に沿うように極めて整合性をもって築造されていることが看取される。そして、第1列よりも西に位置する第0列とも言うべき丸墓山古墳と愛宕山古墳のふたつの古墳は、第1列が形成中あるいはそれ以降に僅かな空間地を活用して、立地的には無理をしつつ築造された古墳と位置づけることができる(第4図)。

このように一見計画的に見える古墳配列は、既に述べたように予定配置の結果ではなく、ある共通観念のもとに一定の築造規範に則り、時系列で古墳を順次築造していく結果の産物とみることが正しい理解であろう。換言すれば、埼玉古墳群における大型墳の主軸方位の統一性と古墳の密集性という現象は、古墳に対して西側からの眺望性を絶対視するというひとつの観念に基づくふたつの結果であるとみることができるのである。

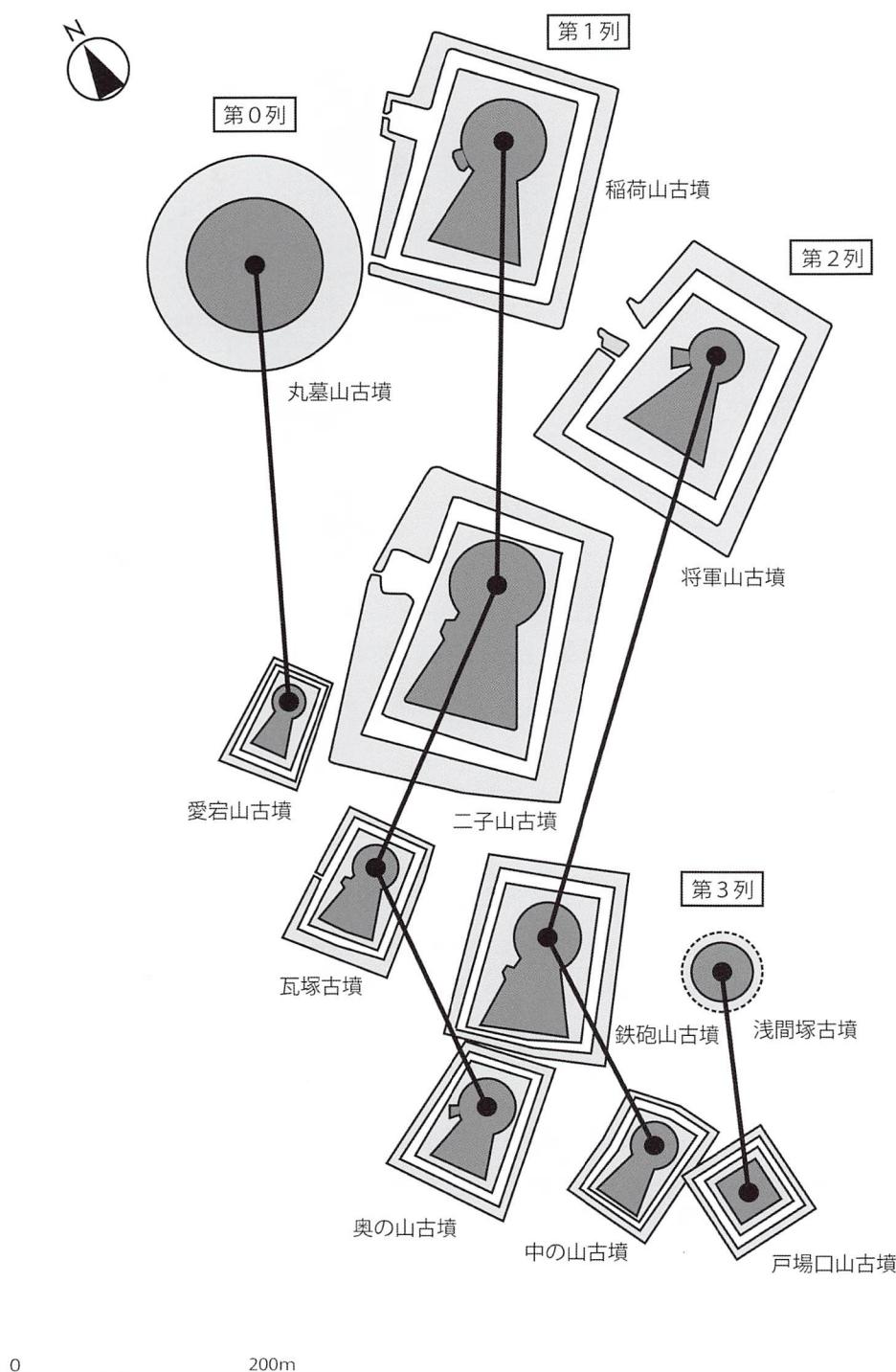
埼玉古墳群については、墳丘規模や樹立された円筒埴輪の規格差によって主系列・副系列というような2ないし3系列の区分が多くの研究者によって提唱されている(増田1991、高橋

2005、城倉2011、若松2011)。

確かにこの古墳群の継起した時間幅と造営された大型古墳の数を勘案すれば、一地域の單一大首長としての一世代一古墳の数を遥かに上回っている。複数系列の意味するところについては、首長とそれに従属した同族、あるいは国造職を継承したものとそうでないものといった解釈も具体的に提示されているように多様な解釈が可能である。しかしながら、これまで見てきたように、少なくとも各々の古墳の立地には系列や規模の差にもとづく配慮は基本的には認めることはできない。この古墳群では墳丘規模にかかわらず、基本的に共通するひとつの原則に従って順次造営されているのである、その意味では古墳間の格差は量的な差ではあっても、主

系列墳が好地を優先的に選択する、あるいは主系列墳が他と異なる特定の条件で造墓地を選定しているといった選地上からみた優先性を示すような質的な差は認め難いのである。愛宕山古墳が二子山古墳の西側に築造することが許容されている例がその良い例である。

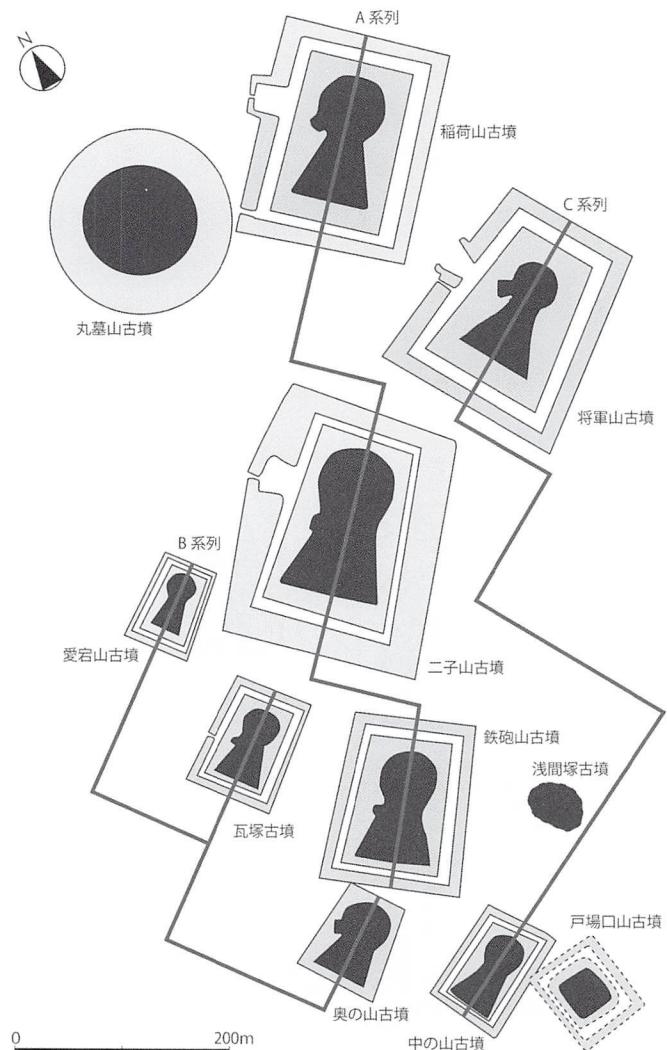
また、一世代一古墳というような発想は直系的な父子相続を前提とするが、古代の宗主権が兄弟を中心に傍系を含む広い範囲での相続を基本としていたことは記紀などの文献を参考にしても明らかであり、実在の信憑性は残るもの記録では5～6世紀代の大王の在位が10年に満たないものも少なくない。5世紀代の大王墓と認められる古市古墳群や百舌鳥古墳群をみても、一世代よりも短い間隔で大古墳が造営されており、埼玉古墳群の場合も古墳築造間隔が短



第4図 築造順による古墳配列

いことを根拠に複数の系列を想定する従来の発想は基本的に正しくないであろう。また、少なくとも主軸方位の差異による系列区分については、各古墳の選地を見る限りその有意性は認め難く、再考が必要であろう⁽³⁰⁾。

誤解のないように付記すれば、筆者も埼玉古墳群全体が一系列の首長墓であると主張しているわけではない。稻荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳が埼玉古墳群の中でもその規模からみて中心的な古墳であることを否定することは難しい。ここでは、見かけ上で中央に位置するようにみえる上記3古墳が選地に際して他に古墳に優先された形跡は認められないと述べているのであり、また古墳の築造時期が近接している状況が必ずしも複数系列を想定しなければならない根拠とはなり得ないと述べているのである。むしろ各古墳の企画や各古墳の構造における他の古墳群に対する排他的な同質性こそ重視すべき視点であると考えている。



第5図 主軸方位による系列区分(高橋2005)

4 古墳の眺望性の史的意味

前章で述べたように、埼玉古墳群は一貫して西側からの眺望性あるいは視認性といった外部からの景観を重視した配置構造を志向している。しかもそれが一世紀以上に渡り貫徹されていることからみれば、このような志向は本質的な意味の喪失した形骸的・伝統的な規範などではなく、実質的な意味や現実的な意義がそこに存在していたであろうことを推測させる。それでは、その要因となった造営主体の立地観念を生み出したところの古墳の眺望性あるいは視認性の意味するところは何であろうか。ここでは、その意味について検討を加えることにしたい。

(1) 古墳とその立地志向

古墳の立地志向については、前期古墳では「丘陵の先端や尾根上あるいは傾斜面または独立丘陵上に立地する傾向が高い」(大塚1966)というように時期による特徴が早くから指摘されている。近年では、より具体的に古墳の立地が耕地やその他の施設との関係性において注意されるようになっている。

若狭徹氏は、群馬県域の大古墳の消長から、大前方後円墳の築造地は開発指向領域と一致し耕地開発と古墳の築造場所は相互に関連するとみなした(若狭2002)。また、北條芳隆氏は若狭氏の見解を支持しつつもその一方で、大規模耕地開発と直接連動して築かれる前方後円墳とは

別に、古墳時代前期後半(4世紀後半)には、交通網の整備に伴い交通網や物流の結節点となる「津」や「市」などを見下ろす地点に、景観の構築を主眼に置いて前方後円墳が築造されるようになると考へた(北條2010)。

このように古墳立地には古墳やその地形のみならず周辺施設との関係性において、ある志向性が認められるようであるが、埼玉古墳群の場合にはどのような立地志向を示しているといえるであろうか。

(2) 古墳とその経済的基盤

古墳の北西側には現在行田市の市街地が広がっているが、そのさらに北西には妻沼低地と呼ばれる利根川中流域の広大な氾濫原が展開している。妻沼低地では5世紀の後半頃から自然堤防上に集落が激増する傾向が窺えることから、吉川國男氏や中村倉司氏等によって、これらの集落をもって埼玉古墳群の経済的基盤として想定されている。吉川氏は、稻荷山古墳の被葬者を「利根川・荒川水系の河川工事に着手し、流域の耕地拡大を成功におさめ、それを足場に下流域・周辺地域を開発」した豪族と推察した(吉川1998)。一方、中村氏も妻沼低地の城北遺跡や上敷免遺跡などの大集落は、埼玉古墳群とほぼ同時期にしかも突然出現したもので「ヤマト王権との関わりの中で北武藏の空閑地が選定され、利根川や荒川の対岸を意識した政策に基づく事象である」と述べ、集落の出現に埼玉古墳群を結びつけるとともに、そこに畿内中枢勢力が介在したことを見定している(中村1999)。

妻沼低地における集落動向をみると、5世紀後半以降に新たな大規模集落の出現が顕著に認められると同時に土師器の器種組成の変化や竈の出現など新出の生活様式の導入を伴う現象が確認され、確かに古墳時代前期からの自律的な発展とは認めがたい部分が大きい。また、その時期は埼玉古墳群の成立期と符合しており、児玉地域などの近隣地域にもこの時期の有力な古墳群は見当たらない。その中で現利根川対岸の群馬県太田市に所在する東矢島古墳群が近年再評価され、割地山古墳(110m)、觀音山古墳(100m)御嶽神社古墳(120m)九合村60号墳(111m)をはじめ沢村野104号墳、105号墳、九合村57号墳などの70m~80m級の前方後円墳が群在しており、埼玉古墳群と遜色ない規模の大古墳群であることが判明している(加部2009)。

この古墳群は現利根川を挟んで妻沼低地と至近距離に位置し、直線距離からみれば埼玉古墳群よりも遙かに妻沼低地と近い位置関係にある。この古墳群の形成時期は埼玉古墳群よりも遅れて6世紀以降と想定されており、妻沼低地の大集落の形成期とは直接結びつかないが、集落の形成に遅れて古墳群が形成される状況も想定できないわけではない。このように妻沼低地の新興集落群が無条件で埼玉古墳群と結び付けられるわけではない。

また、妻沼低地に展開するそれら新興大集落群は低地の北部に集中しており、むしろ本庄台地中央部地域とのつながりが強く、埼玉古墳群に近い妻沼低地中央部から南部にかけての地域では相対的には古墳時代前期の集落が発達しており、後期の集落が前期と比べて相対的に卓越するとはい難い状況にある。仮に妻沼低地北部の大集落群が埼玉古墳群の形成と有機的な関係を有していたとしても、妻沼低地北部は埼玉古墳群とは直線距離でも15km~20km以上離れており、立体構造物の少ない当時においても少なくとも集落や可耕地からの直接的な視認性という点で見ればまったくといってよいほど無い。埼玉古墳群からは妻沼低地に主体的に分布する

有段口縁壙や高壙等が供獻されている事例がみられることから、こうした新興集落群が埼玉古墳群と何らかの関係性を有するとしても、少なくとも両者を眺望性の観点から耕地・集落と墳墓という関係において結び付けることは難しい。

何より、耕地・集落と古墳を有機的な関係においてとらえる発想には基本的な点で注意が必要であると考える。古墳時代の日本列島全体をみわたすと、壱岐の島や瀬戸内海の小島に代表されるように耕地としてまったく適さない小さな離島にも古墳群が形成されている事例が少なからず存在している。こうした事例は、そもそも古墳被葬者や築造者の経済的な基盤を先駆的に農業生産力とみなす危険性を教えてくれる。新たな開発が進んだ古墳時代中期後半以降の豪族の経済的基盤は、農業生産や漁撈などの第一次産業に限らず、窯業生産に代表される各種手工業生産などの製造業や牛馬の生産・生育を含む牧の管理・運営などの專業的な集団が関わる新来の各種産業が導入され定着し、さらにそれら生産物の流通を担う舟運、港湾管理等の物流産業などが生起したと考えられる。古墳時代中期末以降は、それ以前と比べても経済構造がより一層多様化し、相対的に複雑で高度な産業構造を呈するに至っていたはずである。田中広明氏は、埼玉古墳群の経済的基盤として、秩父・長瀬に産し、横穴式石室の石材に多用されている緑泥石片岩の石材差発権を想定している(田中1989)。

大型墳に埋葬された大首長の農業生産基盤を無論否定することはできないが、大型墳被葬者のその全てについて耕地や集落との関係で面的な支配領域を個々に想定してゆくことはこの地域における大型墳の集中度からみても適當とはいえないであろう。

後の武藏国の領域においては、古墳時代後期の前方後円墳に限った場合、墳丘長60m以上の大型墳は各郡1～3基程度であるのに対して、埼玉郡のみ16基も所在し、武藏国内の過半数の古墳が集中している傾向が指摘されている(白石1992)。しかもこれらの古墳は埼玉郡内に均一に分布しているのではなく、特に行田市周辺に集中しており、彼我の距離関係でみるとそれら



第6図 埼玉古墳群と周辺の古墳

の大半はおおよそ直径 5 km の範囲に収まる過密さを示している(第 6 図)。田中広明氏が想定するように小針型壙の分布範囲が埼玉古墳群の直接的な支配領域であったとすると、直径 5 km 以内に所在する、埼玉古墳群に匹敵する規模の他の古墳の支配領域はどこに求めたらよいのであるか。

こうした密集事象は、これらの古墳被葬者の経済的な基盤を単に周辺地域の農業生産力に求めるだけでは到底説明が困難であって、密集する古墳の被葬者あるいは集団がそれぞれ多種多様な経済的基盤・経済活動に錯綜して関わっていたと想定して初めて理解できる現象であろう。埼玉古墳群に供給していたことが確実な鴻巣市生出塚埴輪窯や須恵器生産を担った寄居町末野窯、あるいは石材の産地である長瀬町周辺には、直接に生産や採掘に関与した集団の長を埋葬したと考えられる古墳群が存在する。例えば、生出塚遺跡では埴輪窯周辺に窯操業時と同時期の群集墳が形成されており、これらが埴輪生産工人に関わる墳墓であることは確実であるが、ここでは全長 42.5m の前方部に短いわゆる帆立貝型の前方後円墳である新屋敷 60 号墳の築造を端緒として群集墳の形成が始まり、その後も 20m に満たない円墳が密集して継続的に造営されている。しかしながらその一方で、こうした職能集団を統括していたと想定される大型あるいは中規模の前方後円墳は、この古墳群の内部にも周囲にもまったく存在していない。

6 世紀初頭頃には操業を開始し、6 世紀後半以降埼玉古墳群にも製品を供給している寄居町末野窯の経営主体は旧花園町の小前田古墳群と想定されているが(高橋1991)、ここでもやはり 30m 程度のいわゆる帆立貝型の前方後円墳である小前田 2 号墳を含む 20m 前後の円墳が密集して継続的に造営されているのみで、大型あるいは中規模の前方後円墳は、付近の荒川両岸には存在していないのである。

石材の採掘場所となった長瀬町周辺も同様であって、付近には極めて小規模な群集墳しか存在していない。こうした職能集団が南関東地方に及ぶ広域の製品流通を独自に直接担っていたというモデルを想定することは難しく、生産や流通機構を統括すべき首長が別に存在していたであろうことは想像に難くない⁽³¹⁾。それを大型前方後円墳が集中しているこの地域の古墳に求めることは無謀であろうか。

さらに、集中する大型墳の中には白石太一郎氏が想定するような名代・子代の地方管掌者も含まれていたことも推測される(白石1991)。こうした地方管掌者としての立場も任命された地域豪族にとってはひとつの政治的・経済的基盤であったに違いない。彼らはこそて埼玉古墳群を含む行田市周辺にその墳墓を造営していたと考えると、この地における大型墳の過密さが合理的に説明できるのではないであろうか⁽³²⁾。

(3) 交通路からの眺望性と古墳群

それでは、なぜかくも行田周辺に密集して墳墓を造営する必然性があったのであろうか。そのことを考える際に、先に述べたとおり北條芳隆氏が古墳時代前期後半になって交通網が整備されたことに伴って前方後円墳の築造が「市」や「津」などのからの景観の構築を主眼としたものへと変化したと述べていることは重要な指摘である。こうした動きはいわばモニュメントとしての古墳の眺望対象が、共同体内部の成員からより広範な人々、すなわち共同体外の人々へと拡大もしくは変化したことを示唆するものであろう。さらに岸本直文氏は、五色塚古墳や相模

の長柄桜山1号墳など交通の要衝に築かれた古墳の存在から、この時期に佐紀古墳群に本拠を移した倭王権による海上や河川沿いなどの主要ルートを押さえる政策の推進が読み取れると述べて、眺望対象の転換の背景に畿内中枢権力の関与が存在したことを想定している（岸本2010）。また、広瀬和雄氏も京都府丹後地域の網野銚子塚古墳、神明山古墳、福岡県苅田町の石塚山古墳、同御所山古墳、行橋市の石並古墳、あるいは関東地方では神奈川県逗子市から葉山市にかけての長柄・桜山古墳群や千葉県富津市の内裏塚古墳群などを例示し、いずれも周辺に生産域が望めない立地をしており、政治権力の伸長と生産基盤が必ずしも一致しないことを指摘する一方で、長柄・桜山古墳群や内裏塚古墳群の築造地点は、畿内方面から相模を通り上総など房総方面へ向かう海路の道筋を望む場所にあたることや、兵庫県神戸市五色塚古墳の立地する場所は瀬戸内海から大阪湾に至る海上交通の要と考えられているなど、それらの古墳の多くが当時の交通網の要衝に位置していることを明らかにし、前方後円墳は総体として「共通性や階層性を見せる墳墓であり、そこを往来した大勢の人びとに勢威を見せつけるための政治的記念物だった」と結論づけている（広瀬2003・2010）。

このように古墳時代前期のある段階から認められるモニュメントとしての古墳の顕現化とそれに伴う選地意識の変化は多くの論者の指摘するところとなっている。

ところで、広瀬氏の取り上げた内裏塚古墳群は5世紀中頃から7世紀にかけての継続的に築造された大古墳群である。さらに、大阪府堺市の百舌鳥古墳群や古市古墳群は日本最大級の大古墳群であるが、古市古墳群は「ヤマト王権の政治的中枢が存在する奈良盆地東南部の“やまと”と大阪湾を結ぶ水陸交通の要衝に位置し」、また百舌鳥古墳群も「すぐ西側に後の堺の大津や石津といった重要な港津を望む台地上に位置している」と指摘されているように（白石2009）、こうした志向をもつ古墳群が古墳時代前期後半に限られるものではないことは明らかである⁽³³⁾。また、内陸部においても、例えば吉備地方には5世紀に畿内の古墳と肩を並べる大古墳である造山古墳が所在するが、この古墳の古代幹線道である吉備路の脇に築造されていることは良く知られているところである。さらに繼体天皇陵に擬せられている大阪府高槻市の今城塚古墳もわずか南方100mほどの至近距離に古代の山陽道が東西に走っている。このような事例は枚挙に暇がなく、交通網の実態が不明な地域においては古墳の立地と交通路の具体的な関係性が把握できない古墳も多く存在していると思われる。古墳時代を通じて交通路からの眺望性を意識して造営された古墳は数多く存在するとしてよいであろう。

埼玉古墳群もまた西側に低地を控えた台地縁辺に立地し、西側からの眺望性あるいは視認性を極めて重視して造営された古墳群であるとすれば、その眺望は支配領域の耕地や集落というよりも、交通路もしくは交通に関わる施設からの視認性であるとは考えられないであろうか。そして、古墳群の西側に何らかの交通機能や関連施設を想定する場合、当時の関東平野の状況からみて河川を利用した内水面交通をまずは想定しなければならないであろう。

（4）関東平野の河川流路

埼玉古墳群が、利根川と荒川に挟まれた交通の要衝に位置しているという指摘は比較的早くからなされているところであるが⁽³⁴⁾、それらは現在の河川流路を念頭に置いたもので、関東地方平野部の河川が時間の経過とともにその流域を大きく変えていることにあまり考慮されてい

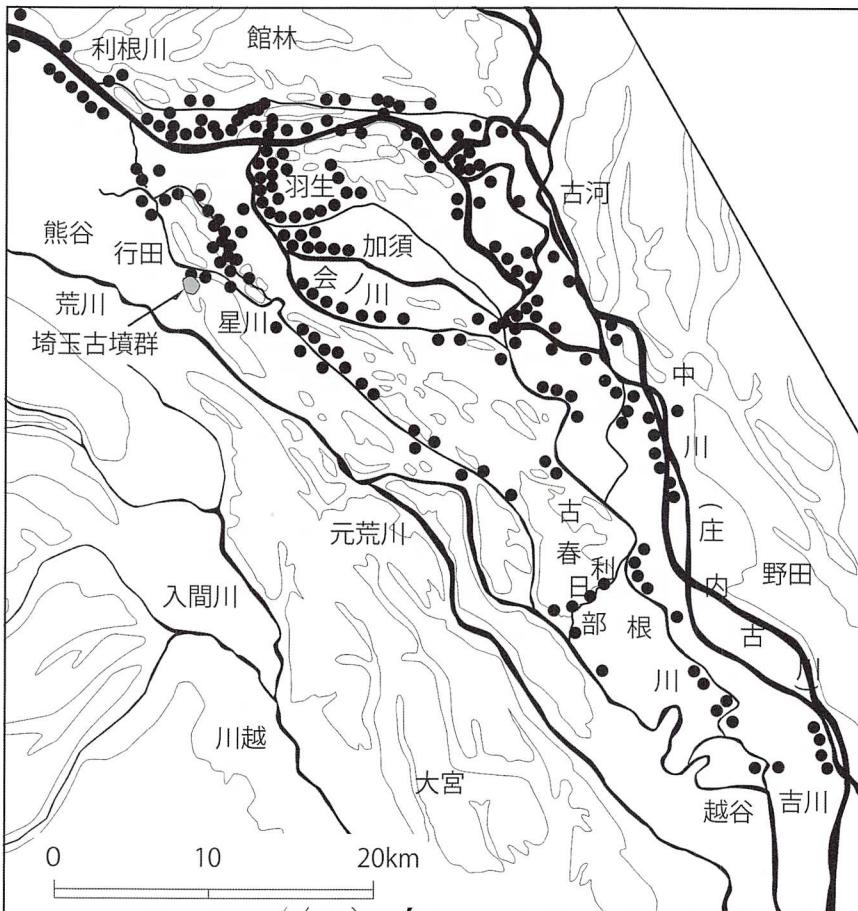
ない。特に平野部において河川と古墳との関係を考える場合、古墳造営当時の河川流路を復元しておかなければならない。

近年では、具体的に秩父長瀬に産出する緑泥石片岩の分布や埼玉將軍山古墳の石材に使用されているいわゆる房州石の流通から埼玉古墳群が内水面交通を深く関わっていたことが想定されるようになり(高橋・本間1994)、さらに古墳群近傍の築道下遺跡が古代の港湾施設と想定されるなど(井上2011)、埼玉古墳群と河川との関わりについてより具体的な検討も進められつつある。

本稿で問題としている古墳の眺望性を議論する場合、岡本健一氏の述べるような観念的な方位論ではなく(岡本1997)、古墳そのものの具体的な可視性こそが鍵となる。はたして、埼玉古墳群について目視可能な範囲に内水面交通を想定することが可能であろうか。次に古墳群周辺の当時の河川流路について検討してみよう。

利根川と荒川の流路変遷については、地質学・地理学の分野で相当量の研究蓄積がある。現在の利根川は、群馬県と新潟県境の大水上山を水源として群馬県域の水系を東ねて南流していくが、烏川との合流後には向きを変えて群馬と埼玉の県境を東流し、再び南に向きを変えつつ茨城と千葉の県境を流下し、銚子で河口に至る大河となっている。現在の流路でみると埼玉古墳群の直近位置は、行田市斎条付近で古墳群の北方6kmほどの地点にあたる。しかしながら、関東地方の平野部を流域とする利根川や荒川は、堆積作用と地盤沈降作用とによって時間軸に沿ってその流路が大きく変遷しており古代の流路は現在のそれと同じではない。菊地隆男氏は、荒川低地の埋没谷の状況から、かつての利根川は中川低地ではなく、現在の荒川筋を流下していたと推察した(菊地1979)。荒川西岸にあたる比企郡川島町付近には古い時代に形成された自然堤防が良好に残存しており、河川跡のボーリング調査によって堆積している砂礫について利根川水系の砂礫であることが確認され、菊地氏の想定が立証された。清水康守氏等は、川島町内の自然堤防上の形成された集落変遷から、この場所に利根川が流下していた時期は縄文時代後期に遡ることを明らかにするとともに(清水2010)、自然堤防などの地形を手掛かりに県内を流下した当時の利根川の流路を具体的に復元した(清水2011)。それによれば、往時の利根川は、県北の本庄市から深谷市を通って行田市に至るまでの間は、現在の利根川の南側を大きく蛇行しながら東流し、行田市斎条付近から南に向きを変えて現在の星川筋を流れ、途中で東流してきた荒川と合流し、新荒川扇状地の扇端部に沿うように行田市内の下忍から樋上に沿って現在の忍川筋や古忍川筋を蛇行しながら南下し、旧吹上町と旧鴻巣市西部地域を通じて吉見町～川島町へと至る流路であったと推定している。その流路は埼玉古墳群が形成された埼玉台地にもっとも近い下忍や樋上地区では、僅か0.5kmほど西側という至近距離にあたる。

また、利根川とともに当時の荒川も自然堤防の状況から新荒川扇状地内を東流していたと推定されている。清水氏は、新荒川扇状地内に形成された自然堤防跡から4本の荒川旧流路を想定しており、南から北へと順に流路が遷っていったと推測している(清水2011)。5～6世紀の段階で荒川がどの流路を流れていたかは定かではないが、これらの流路は清水氏の示す一番南側の第I流路が埼玉台地のほぼ真西の下忍自然堤防付近で旧利根川に合流し、それ以外の第II～IV流路跡は埼玉台地の北側で南流する旧利根川と合流している。つまり、いずれの流路を取ったとしても当時の荒川は現在よりも遙かに北側を東流し、群馬県境から南流する利根川に流れ



第7図 県内の角閃石安山岩の流域分布
(秋池2000第2図を加筆修正)

込む一支流となっていたことになる。従って、地理関係からみれば埼玉古墳群の立地する台地は利根川と荒川が合流した直後の下流側に位置していたのであり、この時点では「利根川と荒川に挟まれた」わけでも「利根川と荒川の中間に位置」していたわけでもない。利根川と荒川が水系として分離するのは、星川や忍川に利根川の水が流入しなくなつて以降のことである。

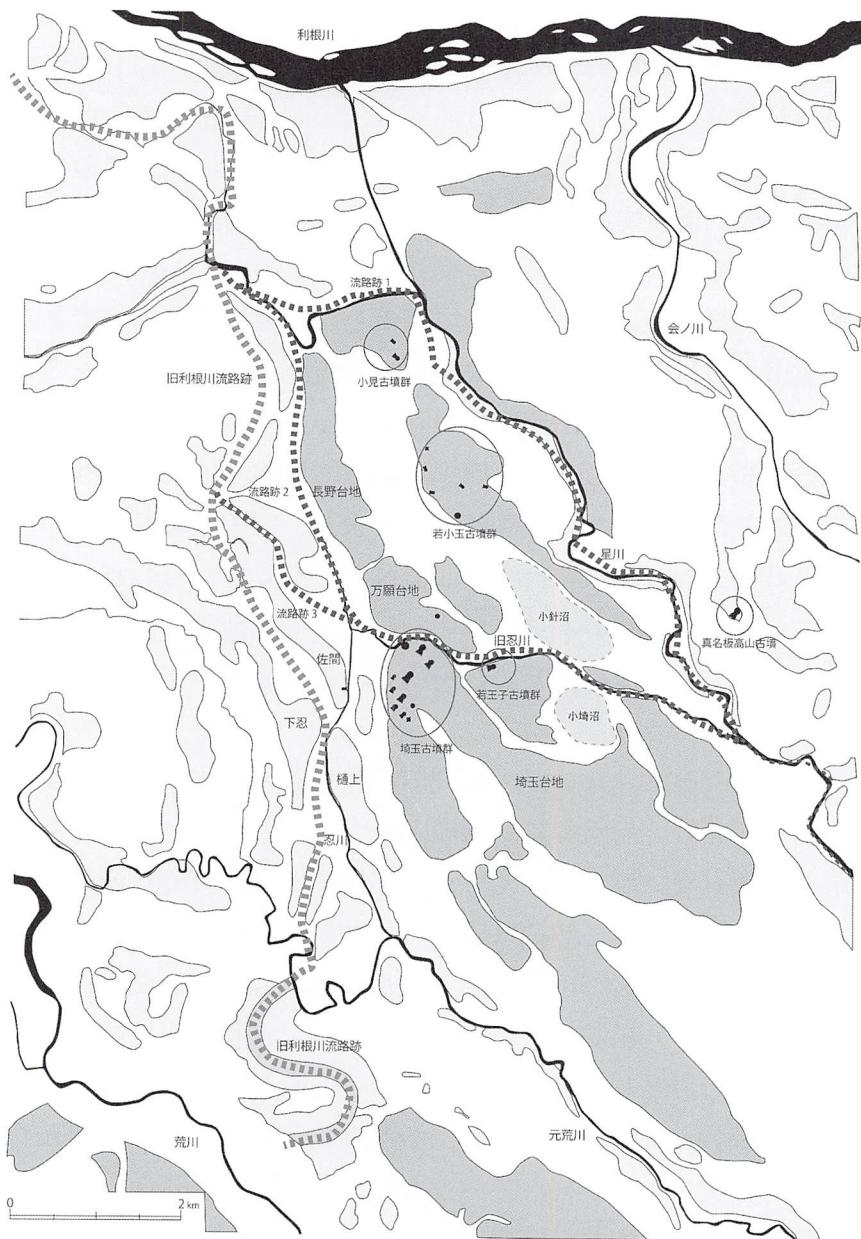
やがて利根川は、主に西から荒川が運び込む土砂の堆積作用と関東造盆地運動による加須～羽生付近を摺鉢の底にした広域の沈降作用による地盤沈下によって、次第に東寄りに流れを

変えてゆき、ついに館林から延びる台地を立ち切って大宮台地として分離独立させ、星川筋をそのまま流れて大宮台地の東側へ流れ出した。その結果、利根川と荒川は別の水系となるとともに、近世初頭の鬼怒川流域への瀬替えが行われるまで、利根川は渡良瀬水系と思川水系をも併せ、鬼怒川水系を除く北関東全域の水系を集めて東京湾に注がれる大河となっていた。利根川の星川筋への流路変遷、つまり埼玉台地の東側に回り込む遷移がいつ頃に生じたかについては、秋池武氏による角閃石安山岩質軽石に分析が極めて有効である。すなわち、榛名山二ツ岳は、6世紀の中頃に大噴火し、その際に噴出した大量の角閃石安山岩質の軽石が当時の河川流路に流れ込んで下流に運ばれた。その分布を調べた秋池氏は、熊谷以西では現在の利根川流域である館林と羽生の間から現在の中川流域あるいは羽生市上新郷付近で分岐した会ノ川流域に点々と分布していることを確認し、その分布域こそ当時の利根川の流路であったとした。それによれば、当時の利根川は、南河原付近で南下して星川に入る流路、会ノ川の流路、中川の流路の3川を中心に、さらにそれらの流路が分岐を繰り返しながら、最終的には吉利根川や庄内古川に収斂し、加須低地を南流して東京湾に注がれていたことになる。また、星川が角閃石安山岩の分布する最も西側の流路に当たり、それより西側の荒川・入間川・元荒川流域には基本的に角閃石安山岩の軽石は認められないことが指摘された(秋池2000)。このように秋池氏の調査によって、6世紀の後半代には利根川は大宮台地の東側を流れていたことが明らかにされたと同時に、平野部においては分流や合流を繰り返す錯綜する複数の流路をたどることもまた明

らかとなったのである。ここで転石の分布を示した秋池氏の図に注目してみると、星川の流路は行田市北東部で複数の流路に分岐し、埼玉古墳群のすぐ北側を流れる旧忍川沿いにも数か所で転石の分布が認められることがわかる(第7図)。旧忍川は江戸時代の開削による人工の運河とされているが、江戸時代の開削以降に利根川が旧忍川に流入したことはないので、この角閃石安山岩はそれ以前に旧忍川が利根川の一支流であったことを示しており、斎条付近から分岐して南下した利根川の一部が行田市北部で星川と合流後さらに分岐し、その一方が南下して行田市街地付近で忍川の流れと合流し、長野台地の西側に沿って南流し、現在の旧忍川筋である埼玉古墳群のすぐ北側を抜けて、旧川里村付近で再び星川に合流する流路が存在していたことがわかる⁽³⁵⁾。あるいは、自然堤防の状況からみて行田市街地で利根川から分流して左間台地の東側を抜ける流路も存在したかもしれない。ただししかし、旧忍川筋は後に人工的に掘削されたことからみても、当時から主たる流路ではなかったと推測できる。また、行田市桜町付近から分岐して長野台地の東側を抜けて小針沼を通り星川に合流する流路も存在したかもしれない。このようにいくつかの流路を推定することが可能であるがいずれにしても秋池氏の調査によつて、少なくとも6世紀の中頃以前に利根川の分流のひとつが埼玉台地の東側の星川筋や旧忍川筋に流路を変えていたということが明らかにされた。

その流路変遷時期がどこまで遡るかは明確ではないが、佐間の自然堤防上に古墳時代初頭頃から集落が形成され始めることは重要である。自然堤防が形成されつつある時期に集落を営むことは考え難いとすれば、縄文時代後期以降に形成され始めた自然堤防が、古墳時代初頭に一旦形成が止まっていることが推測され、流路の変遷時期は古墳時代初頭頃まで遡る可能性がある。現段階では、古墳時代初頭～中期にかけて流路の遷移があったと推測しておきたい。ただし、角閃石安山岩の分布でもわかるとおり、6世紀代においても平野部では利根川は幾筋もの流路に分れ、合流と分岐を繰り返しながら錯綜して流下していた様子を示している。利根川の遷移もある時点で大きく流れを変えたというよりも自然の営為の中で幾筋もの流れが隆盛したり途絶したりと盛衰を繰り返しながら、次第に東へ移っていったとみるべきであろう。5世紀代に埼玉台地の北で分岐した流路が台地の両側を流れていたということも無碍に否定することはできない。

いずれにしても、当時の利根川は現在よりも遙かに埼玉古墳群に近く、古墳群から数百メートルの至近距離を流れていたことは確実と思われるが、仮にその流路が佐間や下忍の自然堤防の西側や埼玉台地東側の星川筋でも万願台地の東側であったとすると、至近距離とはいえ、その位置では古墳群の眺望性には難があるという見解が提示されるかもしれない。しかしながら、「津」などの港湾施設は、主要河川に直接面するのではなく、そこにつながる細い水路沿いに形成されることが多いといわれている⁽³⁶⁾。埼玉古墳群の西側だけをみても、佐間と下忍の自然堤防、埼玉台地と樋上の自然堤防の間は狭隘な低地帯となっており、杉崎茂樹氏の想定するとおり、何らかの水路となっていたことは容易に推測できる(杉崎2004)。埼玉古墳群のすぐ西側が台地に囲まれた入江状となっており、長野台地と佐間の自然堤防の間の低地帯にも水路が所在していたと推測すれば、その位置は埼玉古墳群の眼下であり、古墳を仰ぎみることが十分に可能な位置であるといえる。



第8図 埼玉古墳群周辺の主要古墳群と当時の推定河川流路

たる海上交通の要衝に位置する。

これまで述べてきたとおり、当時の利根川や荒川は現在よりも遙かに埼玉古墳群の近傍を流れていると推定され、埼玉古墳群は利根川のもっとも西側を流れる支流が荒川と合流したそのすぐ南側に位置することになる。ここは、旧利根川を介して東京湾東岸地域を直接連絡しているとともに、利根川本流や荒川水系を利用して、上毛野西部地域や秩父地域などに連絡することが可能である。また、分流や合流する河川を利用して、渡良瀬水系や思川水系など利根川に合流する主要な支流を伝って、上毛野東部地域や下野南西部地域などに連絡すること也可能である。このような地政学上の特長を考慮すれば、この古墳群もまた列島各地で見受けられる物流の要衝を見下ろす地点に立地する古墳や古墳群と共に、内水面交通の要衝をおさえる地政学上の重要な地点にその眺望性を重視して造営された古墳群とみなすことができるであろう。

(5) 内水面交通と埼玉古墳群

東国では交通の要衝地に大型墳が集中する傾向にあることは既に早くから指摘されているところである。白石太一郎氏は、霞ヶ浦北部の沿岸部に6世紀の大型墳が集中する現象について、この地域が「常陸各地やそれ以北の陸奥と畿内を結ぶ交通の要衝」に位置していることを指摘し、またやはり後期の前方後円墳が集中する下伊那地方の飯田市周辺についても、そこが神坂峠の麓で東山道の最も重要な中継地であると述べている(白石1991)。同じく後期の大型墳が継続的に造営された内裏塚古墳群が所在する木更津周辺の河口付近も、古東海道を東進し、三浦半島を廻って東京湾を横断した最初にたどりつく地点にあたり関東地方から東北地方への繋がる入口にあ

東国における大型墳の偏在性について、畿内と地方を結ぶ交通の要衝地が畿内政権やそれを構成する畿内豪族にとって、きわめて重要な地域として重視されたためとする評価があるが(白石1991)、これをして立場からみれば、関東平野中央部の平坦な地形にあって、水系が山岳や丘陵等で明確に区分されず分岐や合流を繰り返すような錯綜する地域においては、毛野地域や上総地域と異なり自然地形による領域区分が明確にし難いという地形環境を背景として、多種多様な経済的基盤を有する有力者が各地に分散せずに物流の要衝に地域拠点を形成し、そこに古墳の眺望性を求めて競って古墳を造営したものと推測することができるであろう。

古墳時代後期の東国の豪族層が倭国の重要な軍事的・経済的基盤となっていたことは古墳時代後期に東国に大型の前方後円墳が多数造営される状況や副葬品の在り方等からたびたび指摘されているところであり、実際の軍事動員という意味でも「津」のような内水面交通の要衝に地域の拠点が形成されることを合理的なことに違いない。

埼玉古墳群内で6世紀後半に築造された埼玉將軍山古墳では、十文字心葉形鏡板巻を伴うセットのような馬具に加えて、三葉文環頭大刀、蛇行状鉄器や馬胃など半島系遺物の副葬が顕著である。これらには奢侈品にとどまらず身分表象と不可分の品を含んでいることから高位者の往来を想定している意見や(太田1994、内山1992、2011)、あるいは具体的に国造軍の指揮者として半島出兵を想定する考えも示されている(塙田1992、若松1993)。その実態はなお不明といわざるをえないものの、そのような活発な交流活動を通じて物や人が往来する際に、埼玉古墳群の威容は視覚的な効果を十分に發揮したに違いない。

むすび

埼玉古墳群を含めたこの地域における大型古墳の集中を内水面交通と結び付けて理解しようとすると、ただちに万葉集に謡われた「さきたまの津」との関連が連想されると思う。文献史学を中心に埼玉古墳群と「さきたまの津」を関連づける議論は古くから数多いが、それらは学術的な根拠に裏打ちされたものというよりは、「埼玉の津は、武藏国造一族によって吉利根川の川筋か、埼玉沼の岸辺に整備された河港と考える」(藤倉2010)というような漠然とした憶測にもとづくものであった。

その所在地についても、埼玉古墳群の東方に位置する小埼沼周辺とする見解が確固たる根拠がないままに通説化していた。万葉集に採録されたさきたまの津の東歌が実際に詠まれた時期については定かではないが、高橋連虫麻呂が東国周遊の際に収録したとする説(藤倉2010)が有力であるとすればやはり8世紀代を大きく遡ることは考えづらい。「埼玉の津」の所在地を小埼沼とみる説が後世に有力視されるに至った経緯は、学術的な検討以前に同じ万葉集に採録された「小埼沼」の歌と関連させる発想が多分に影響を与えていたに感じられる。

最近では、小埼沼は中世に沼沢化した場所であり、「さきたまの津」はそれよりやや北寄りの小針遺跡周辺と推測する見解も提示されている(中島2010)。いずれにしてもそこは古墳群の東方に位置しており、本論で述べた埼玉古墳群の志向した方向性とは正反対の方角に当たることから、本稿の趣旨とは相容れないという意見が出るかもしれない。

しかしながら、「さきたまの津」の所在地にかかる物証は今日においてもまったく確認されていないのであり、古代の「さきたまの津」が埼玉郡の郡津として存在し、なおかつ現在推定され

ている地点で仮に正しいとしても、既述したように河川の流路変遷が著しいこの付近ではそれをそのまま5世紀にまで遡及させうる保証は何もない。むしろ河川流路が時間の経過とともに変遷していることを想起すれば、それに伴って港湾施設も移動しているとみるほうが自然であり、津のような施設が長期にわたり特定の場所に固定していたとは思えない。通説に対する考古学の立場からの批判は既に繰り返しなされているところである(井上2007・2010・2011)。

埼玉古墳群については、古墳群と歌謡のそれぞれの成立期に時間的に大きな懸隔があるにも関わらず、万葉集の「さきたまの津」の記事とその津の推定地に影響されて、古墳群の東側の方角が注視されてきた。しかしながら、これまで述べたように埼玉古墳群中の大型墳が略同一主軸方位でかつ密集して造営された理由は、古墳の西側側面をその正面観として、西側からの古墳の眺望性をなにより最優先にして古墳が造営され続けられたことにほかならないからであり、西側を正面観とする築造原理は同じ墓域上に所在する小円墳にまで貫徹されている。このような埼玉古墳群の形成過程とその基底にある築造意識から窺う限り、5世紀から6世紀にかけては埼玉台地の西側で佐間の自然堤防と万願台地との間に挟まれた入江状の地形こそが、この古墳群にとって極めて重要な意味を有していたものと推測できる。

おそらく、古墳群の西側には埼玉古墳群の威容を仰ぎ見るような交通に関わる設備もしくは施設が所在しており、そこからの眺望性を第一義的に優先して継続的に古墳を造営したことが、埼玉古墳群がこのような配列となった歴史的な意味ではないかと考える。

(平成23年7月25日脱稿)

埼玉古墳群における大型墳の主軸方位の統一性と密集性というこの古墳群の景観を特徴づける古墳配置について、考古資料に拠りつつどのように理解したらもっとも整合性がある説明となりうるか。本稿はそうした問題意識がもとになっている。その結果、各古墳の施設の構造や配置から西側からの眺望性を強く意識し、それを主眼とし遵守して各古墳が順次造営されたためであると結論づけた。そして、その解釈として従来の主軸方位に基づく地域政権規制論や山岳信仰と結び付けるような観念的な論説を排除し、具体的に古墳群の西側に内水面交通路や港湾施設の存在を想定し、そこからの眺望を意図したものと想定した。それがこの古墳群の終焉まで貫徹されていることは、西側からの眺望がこの古墳群にとっていかに重要事であったかを示して余りある。

ただ、河川の流路も関連施設の位置も古墳時代後期を通じて不变であったわけではない。埼玉古墳群が長期にわたり継起した間には、古墳群の被葬者の地位や性格の変質と同時に、利根川水系の流路変遷に伴う水路や港湾施設の位置関係など古墳群の周辺環境の変化も大きく作用していると推測している。それについては次回に論じることにしたい。

筆者はこれまで古墳出土遺物に关心を持ちつつも、いくつかの理由で古墳の分布論や遺跡論を意識的に避けてきた。しかしながら、史跡埼玉古墳群については平成19年度に世界遺産暫定登録候補の提案書を提出したところであり、その事務の一端に関わった立場から選考結果における古墳群の学術的な研究が不十分という指摘は、個人的にも大きな課題として受け止めざるを得なかった。アジア全体における比較研究もさることながら、当該資産そのものの分析や研究もとても十分とはいえない状況にある。今年度に当館に異動したことを機会に、埼玉古墳群

の解明に取り組むことで少しでもその責めを果たしたいと思う。

なお、本稿は平成22年12月6日に行った岡山大学創立60周年シンポジウム「巨大古墳の世界」の発表要旨及び平成23年2月5日に当館で行った世界遺産関連講座「埼玉古墳群から東国の古墳文化を考える」の発表要旨が素地となっている。埼玉古墳群に関する研究は埼玉稻荷山古墳から出土した鉄剣から金錯銘文が発見された以降に限っても膨大な量にのぼる。逐一の明記はしないが引用した以外にも既往の個別研究の成果を多く活用させていただいた。

古墳時代の河川流路については、熊谷市史研究第3号の所収された座談会での議論が参考になった。席上で本稿の趣旨も一部口頭発表している。その際、柿沼幹夫氏や清水康守氏からは有益な助言を受けた。古代の交通については井上尚明氏から多くの示唆を受けた。また、秋池武氏からは角閃石安山岩転石に分布について丁寧なご教示をいただいた。行田市域の自然堤防の状況については市教委の中島洋一氏にご教示いただいた。さらに勤務先である県立さきたま史跡の博物館の中村倉司・末木啓介・佐藤康二等学芸員諸氏との日常的な議論は本稿にとっても極めて有益であった。記して感謝したい。

《註》

- (1) 地元伝承は別として学術的に埼玉古墳群を武藏国造の墳墓とみなしたのは横浜市史(和島・甘粕1958)の記述が最初である。その後、齋藤忠氏による「さきたま古墳群は、いわば国造一家の墓地であると言える」(井上1978)等に代表されるように、国造制の成立に係る議論はなお決着してはいないにもかかわらず埼玉古墳群が武藏国造とかかわりがあるとする見方が今日では通説化している。
- (2) 例えば、これまでにも「狭い範囲に前方後円墳が規則的に築造されたこと」は、「埼玉古墳群に葬られた首長層の社会的関係」を反映する(坂本2001)や「独自の周堀形態が長期間、統一的に採用されている事実は、古墳の平面設計という可視的レベルにおいて、他集団との差異を表示しようとする意図が、歴代の古墳築造主体に受け継がれていたことを示すものだろう」(太田2007)等の解釈が試みられている。最近、井上尚明氏は、埼玉古墳群が立地する台地の微地形に注目して、古墳の集中性を解釈している(井上2009)。
- (3) 方位規制論や埴輪規格規制論には懐疑的な立場の見解も存在する。例えば、「前方部を西に向ける前方後円墳と埴輪の相対的小型化が埼玉古墳群の規制によるものと証明することはできない」(中村1999)など。
- (4) 埼玉古墳群の前方後円墳の方位が略同一方位であることを考古学者の立場から最初に指摘したのが昭和10年の後藤守一博士による発表であることを塩野博氏が明らかにしている(塩野2004)。また、「現存する8基の前方後円墳の全てが、前方部を南に向いている点は、これらの古墳群形成の過程に有機的な関係があり、互いに同じ意識がはたらいていたように思われる」(齋藤・大塚1980)に示されるように、埼玉古墳群の前方後円墳の方位の統一性が築造主体による意識の共有化にもとづくものであることについても早くから指摘されている。
- (5) 同一古墳群内における古墳の立地が、相対的な古墳の築造時期を考察する指標となりうることを実践的に示した先駆的な研究として白石太一郎氏による百舌鳥古墳群の分析がある(白石1969)。
- (6) 井上尚明氏は、埼玉古墳群では一定の墓域を意識しながら「都市計画的な占地計画に基づき各古墳を配置していった」ことが窺えると述べている。筆者は築造主体に存在したものは具体的な配置計画ではなく占地に対する規範や共通意識といった観念であったと考えている。
- (7) 埼玉古墳群の各古墳の概要や調査状況については、本文中で逐一の文献提示をしないが、特に例示しない限り、参考文献に提示した埼玉県教育委員会発行の一連の報告書に拠る。
- (8) 埼玉古墳群の編年については、既に多くの研究成果がある。中でも近年の代表的なものとしては、坂本

1996、増田1999、太田2007などがある。また、古墳群から出土した土器の変遷についても、岡本1997、利根川2003などで包括的に整理されている。本稿もそれらを参照している。

- (9) 稲荷山古墳の年代を巡る見解については、利根川章彦氏により丁寧に整理されている(利根川2002)。
- (10) 宮代栄一氏は、副葬品のアセンブリッジの検討からこれらの副葬品の年代はTK47型式期に位置づけることができ、須恵器の年代と一致することを述べている(宮代1996)。
- (11) 稲荷山古墳造出し付近出土の須恵器と調査された主体部との関係性については、いくつかの解釈が存在する。TK23~47型式に属する須恵器を築造当初に伴うものとした場合、調査された主体部を同一型式内とみる見解と須恵器よりも後出するMT15型式(古)段階とする見解があり、また、須恵器を追葬に伴うものとみる場合でも、未見の主体部を同一型式内に収まるものとする見解と須恵器の型式よりも遡る時期に想定する見解に分かれる。筆者の考えは以前に述べたことがあるが、須恵器が古墳築造当初のものか追葬に伴うものかは確定できないが、少なくとも発掘調査された主体部の年代は、TK47型式の枠に収まるものとするものである(関1991)。

後に述べるように、古墳群中の各古墳の造出しからはいずれも供献土器が出土しているが、同一古墳における土器のまとまりには大きな時期差が認められない。つまり、造出で複数回儀礼が執行された明確な痕跡は認められない。先行する土器類は全て取り片づけられて最終段階の供献土器のみが存在すると理解することも可能であるが、將軍山古墳の須恵器をみる限り、石室内の副葬品よりも造出しから出土した須恵器の方が相対的に古く位置づけられ、築造時の供献土器が残されているとみなすのが自然である。その一方で追葬時には造出の供献儀礼は執行されずに石室内に須恵器が納められた可能性が大きい。稲荷山古墳についても、未知の埋葬主体部が存在するとして、初葬時の供献土器類は全て取り片づけられたとは想定し難く、やはり筆者は造出上の供献土器は築造当初のものであろうと考えている。無論、仮にそのとおりだとしてもそのことが未知の埋葬主体部の存在を否定するものではないことは既に述べたところである。

- (12) 利根川章彦氏は、埴輪の作り置き説を提示し、埴輪型式の系統順が正しいとしても、それが必ずしも古墳の築造順とはならないと考えている。2011年4月県立さきたま史跡の博物館講座「人物埴輪配列の意味」発言要旨。
- (13) 丸墓山古墳では古墳築造前の旧地表面からHr-FAと推定される灰白層が報告されている。しかしながら、平成19年度に実施した奥の山古墳では墳丘下の旧地表面では肉眼による観察ではHr-FAを明確にとらえることができず、サンプリングによる土壤分析によって検出することができた程度の堆積状況であり、少なくとも旧地表面には層状に火山灰が堆積する状況は認められなかった。明確にHr-FA降下後の築造である將軍山古墳の旧地表面からもHr-FAは検出されていない。周堀については、降灰後に二次的に周囲から流れ込むことも想定されるし、旧地表面においても微妙な起伏によって、堆積状況は異なることも想定されるので一概には言えないが、古くに調査され肉眼観察によるのみの火山灰の同定には慎重な判断が求められよう。二子山古墳の周堀に堆積していたとされるHr-FAについてはその同定について既に懷疑的な見解が示されている(岡本1997)。
- (14) 奥の山古墳の須恵器の位置付けについては酒井清治・藤野一之両氏のご教示による。TK10型式(新)とは、TK10型式とTK43型式の間の未名型式を指す。
- (15) 出土した埴輪の突帯の扁平率を検討した岡本の分析によれば、鉄砲山古墳の埴輪は將軍山古墳の埴輪よりも、赤系・橙系ともに扁平度が大きいという結果が示されている(岡本1997)。
- (16) 埼玉古墳群の系列設定の代表的なものとして、墳丘規模と埴輪規模によって、100m級の大型前方後円墳である稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳・將軍山古墳、60m級の中型前方後円墳である愛宕塚古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳、20m級の円墳群を含めた3系列区分(増田1987)や5条以上の凸帯を有する大型の円筒埴輪を有する稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳を中心とし丸墓山古墳・瓦塚古墳・將軍山古墳を

加えた「主系列墓」と3条もしくは4条の中型円筒埴輪をもつ天祥寺裏古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳の「副系列墓」の2区分(城倉2011)、100m以上の古墳と90m以下の古墳の2系列(若松2011)などがある。指標は各々異なるものの結果的にそれらはほぼ同様の区分となっている。これらの前提として、「約百年の間に10基の古墳を築造したとしなければならない。一世代一古墳の世代累系墳とするとあまりに短すぎる」(増田1987)という基本認識が存在する。

- (17) 平成20年度奥の山古墳現地説明会資料による。
- (18) 造出しには、「造出し」、「造り出し」、「造出」等の表記方法がみられる。当館では「造出し」という表記に統一しており、本稿でもそれに従うが、引用部分についてはそれぞれ原典のとおりとしている。
- (19) 正確には西北西～北西の方角に当たるが煩雑さを避けるために、以下、便宜的に西と表現する。
- (20) 「墳頂の埋葬施設上面を方形に囲むために近づくことができない死者の靈魂に対し、現世に残された子孫や近親、近習たちが弔うための場として造り出しが創出され、そこで家形埴輪を配置して墳頂の家形埴輪に拋る死者の靈魂を呼び、実際に供物を捧げたり、それに替る土製品を供えたりして、共飲・共食する飲食物供献儀礼がおこなわれ」と述べている(小浜2005)。
- (21) 共飲・共食を伴うかどうかについては横穴式石室の須恵器から類推されたような状況(白石1975)が現在なお造出し部において確認されているわけではない。供献の内容についてはなお不明な点が多いが、稻荷山古墳では、先に述べたように前方部隅に設けられた中堤への進入路となる土橋脇に土器及び神饌を模したと推測される土製品が出土しており、このような土器や土製品は通路に対する供献や避邪の行為に近いものではないであろうか。
- (22) 造出しや土橋を墓への進入路とみなす見解には、「埴輪、土器類を用いた葬送儀礼に係る行為の場」「祭祀の道」(白井1983)をはじめ、「方形周溝墓の溝の途切れた陸橋部の付近に土器が供献されることが多い。このことは、この場所が墳丘中央の埋葬部にいたる墓道であり、かつ死者の葬送における重要な儀式の場であることを示す」(都出1992)、「カミの出入り口と考えられる造り出しが4世紀末ごろから定着し」(広瀬2010)、などがあり、議論としては定着している。
- (23) 塚田良道氏は、飲食物の供献が食物供献を体现した女性人物埴輪に転置してゆくと考えている(塚田1998)。また和田晴吾氏も高橋克壽氏の説を引用し、人物埴輪出現の意味を造出しの創出と結びつけて解釈している。確かに、一般に人物埴輪群は6世紀には造出しや墳丘裾の埴輪列に組み込まれてゆくが、堤上儀礼が形象埴輪列の初源的な姿としてとらえられるならば、後に造出し上に統合されたことで飲食物供献儀礼と人物埴輪の樹立による儀礼に有機的な関係が成立したとしてもそれは後天的な機能の転換もしくは変質を示すものであり、両者は本来は異なった場所を占める異なった内容を持つ儀礼として成立したものではないだろうか。
- (24) 埼玉古墳群では西側を古墳の正面とする意識があったのではないかという考えは従来から存在した(岡本1997)。このことを最も早く指摘したのは、筆者の知る限り、稻荷山古墳の中堤造出しと土橋の位置関係から稻荷山古墳の正面を西側ととらえた白井久美子氏の見解である(白井1983)。高橋一夫氏も造出しの附設された方角が古墳の正面であったと理解している(高橋2005)。
- なお、岡本氏は、その理由として群馬県の榛名山や赤城山といった自然地形を意識しつつ上毛野地域への意識の傾斜として解釈しているが、三方に山を望むこの地で、なぜ特別に榛名山や赤城山が意識されたのかといった理由を合理的に説明付けることは難しいであろう。また、古墳の方位を上毛野国との関係という地域政治性に根拠を求めるについても十分な類例の提示が求められるものであり、やはり憶測の域を出ないものと言わざるを得ない。
- (25) 中島洋一氏から教示いただいた。
- (26) 二子山古墳の南側が北側よりも優先された理由については、巨大な丸墓山古墳が西側に位置する二子山古墳の北側よりも西側からの眺望が開けていたからであると推測する。ここでも南北の方位よりも西側か

らの眺望性が優先していることがわかる。

- (27) 天祥寺裏古墳については詳細がなお不明であり、4条突帯の円筒埴輪が出土していることから前方後円墳とみる見解もある。
- (28) 埼玉古墳群以北に所在する前方後円墳が結果的に東西方向に主軸をそろえていることが多い理由は、その付近の河川が東西方向に流路をもつものが多く、自然堤防も結果として東西方向に発達しており、そうした地形上の制約を受けつつ、古墳の側面を河川流路に向けて築造する志向性があつたことなどが影響していると考えている。
- (29) 前方後円墳を採用していない超大型円墳である丸墓山古墳の被葬者論はその特異性ゆえに極めて活発である。坂本和俊氏は、武蔵国造の乱の一方の主人公である小杵の墓に想定し(坂本1996)、中村倉司氏は反対に使主の墓と考えている(中村2010)。また、杉山晋作氏も丸墓山古墳と二子山古墳の関係にいわゆる「武蔵国造の乱」の情況を投影した見解を提示している。純粹に考古学の立場から丸墓山古墳の被葬者を特定することは困難であるが、立地からも窺える丸墓山古墳の特異性に対する解釈のひとつではあろう。筆者は具体的な被葬者像の推測よりも遺構や遺物の分析を優先する立場に立っているが、坂本氏が丸墓山古墳の築造位置について二子山古墳よりも稻荷山古墳の被葬者に血縁的に近いことを理由に挙げている点については、むしろこの場所に築造された理由は被葬者間の血縁の濃淡によるものではなく、立地条件を考慮すれば先に述べたとおり視界の遮蔽性にあると考えた方が合理的であるように思う。いずれにしても、丸墓山古墳の築造はこの古墳群にとっては、極めて波風の立つ行為だったに違いない。
- (30) 白石太一郎氏は、東国における6世紀における大型墳の集中について、「畿内王権から一定領域の支配権を認められた領域支配者としての「国造」とみるよりも、特定の名代、子代などの地方管掌者としてそれらを統括する畿内の有力豪族や伴造豪族などと結ばれていた在地豪族のあり方と対応する可能性が大きい。」と述べている(白石1991)。
- (31) だからといって、こうした中小の前方後円墳と埼玉古墳群の中核をなす大型墳との間に整然としたピラミッド構造を想定しているわけではない。
- (32) 行田周辺に後期の大型古墳が集中することの歴史的な解釈については別稿を用意している。
- (33) 百舌鳥古墳群では大阪湾を望む南北方向の各古墳のみならず、内陸の東西方向を主軸とする各古墳についても百舌鳥川・百済川の水上交通からの眺望を意識した立地であることが指摘されている(十河2003)。
- (34) 旧埼玉県史に記載された事例が最初である。考古学的な立場からは渡辺貞幸氏が埼玉古墳群と利根川の流路との関係に言及した最初であると思う(渡辺1987)。
- (35) 秋池武氏から調査資料の提供を受け、丁寧なご教示をいただいた。
- (36) 井上尚明氏のご教示による。

《参考文献》

- 秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩の分布と歴史的意義—榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石—」『群馬県立博物館紀要』 第21号 群馬県立博物館
- 甘粕 健 1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本7 関東』 角川書店
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編 1979 「特集・火山堆積物と遺跡 I <関東地方北部>」『月刊考古学ジャーナル』 1
- 井上 尚明 2007 「さきたまの津を探る」 埼玉県立史跡の博物館紀要 創刊号
- 井上 尚明 2009 「埼玉古墳群と東国の古墳」『遺跡学研究』 第6号 日本遺跡学会
- 井上 尚明 2010 「考古学から見たさきたまの津」『さいたまの津を考えるシンポジウム資料』 野外調査研究所
- 井上 尚明 2011 「「さきたまの津」と将軍山古墳」『埼玉考古』 46 埼玉考古学会

- 井上光貞他 1978 『鉄剣の謎と古代日本』 新潮社
- 上田 宏範 1951 「前方後円墳の造出の推移」『考古学論叢』 檜原考古学研究所紀要 第1冊 檜原考古学研究所
- 内山 敏行 1992 「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』 1 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 内山 敏行 2011 「毛野地域における6世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』 季刊考古学別冊17 有山閣
- 大矢雅彦・高山 一・久保純子 1996 「荒川流域地形分類図」 建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
- 太田 博之 1994 「埼玉將軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』 第1号 日本考古学協会
- 太田 博之 2007 a 「武藏北部の首長墓」『武藏と相模の古墳』 季刊考古学別冊15 有山閣
- 太田 博之 2007 b 「北武藏における後期古墳の動向」 考古学リーダー12『関東の後期古墳』 六一書房
- 大塚 初重 1966 「古墳の変遷」 日本の考古学IV 古墳時代(上)
- 岡本 健一 1997 「將軍山古墳」 史跡埼玉古墳群整備事業報告書 埼玉県教育委員会
- 小浜 成 2007 「古墳における儀礼の場の変遷過程と倭王権」『埴輪群像の考古学』 大阪府立近つ飛鳥博物館編 青木書店
- 柿沼幹夫他 2011 「座談会 荒川の流路と遺跡—荒川新扇状地の形成と流路の変遷—」 熊谷市史研究 第3号 熊谷市教育委員会
- 加古川市教育委員会編 1997 「行者塚古墳発掘調査概報」 加古川市文化財調査報告15
- 門脇 伸一 1997 「市内遺跡確認調査報告—平成8年度調査—」 行田市教育委員会
- 加部 二生 2009 「太田市東矢島古墳群の再検討」『利根川』 31
- 櫃本 誠一 1968 「岩橋千塚の前方後円墳—2 前方後円墳の造り出しについて」『岩橋千塚』 和歌山市教育委員会 『前方後円墳・墳丘構造の研究』 学生社2001に再録
- 菊地 隆男 1979 「関東平野中央部における後期更新世以降の古地理の変遷」 第四紀研究 17
- 菊地 隆男 1981 「先史時代の利根川水系とその変遷」 アーバンクボタNo.19 久保田鉄工株式会社
- 岸本 直文 2010 「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史2 古墳時代』 吉川弘文館
- 久保 純子 2004 「利根川中下流流域における歴史時代の河道変遷—埼玉県東北部、幸手市周辺の微地形を手掛がかりとして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』 118
- 栗原文蔵他 1978 「鴻池・武良内・高畠」 国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第11集 埼玉県教育委員会
- 後藤 守一 1935 「考古学会第40回総会記事」『考古学雑誌』 第25巻 第6号 考古学会
- 小林 行雄 1955 「古墳発生の歴史的意義」『史林』 第38巻 第1号
- 近藤 義郎 1983 『前方後円墳の時代』 岩波書店
- 近藤 義郎 2000 『前方後円墳観察への招待』 青木書店
- 齋藤 忠他 1980 『埼玉稻荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 齋藤 忠・大塚初重 1980 『稻荷山古墳と埼玉古墳群』 三一書房
- 酒井 清治 1997 「関東の古墳時代須恵器編年」『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 坂本 和俊 1981 「埼玉の前方後円墳」『歴史手帳』 第9巻 第5号
- 坂本 和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳6』 群馬県土器観会
- 坂本 和俊 2001 「考古学からみた稻荷山古墳の出自」『稻荷山古墳の鉄剣を見直す』 学生社
- 佐藤源之・渡邊 学・井上尚明 2010 「奥の山古墳の地中レーダー探査実験について」 埼玉県立史跡の博物館紀要 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会

- 清水康守・駒井 潔・小林健助・小川政之・堀口万吉・金子直行・加藤智江 2010 「荒川低地北部の地形発達—利根川の流路変遷を中心として—」『埼玉県立自然の博物館研究報告』 第4号
- 杉崎 茂樹 1985 「鉄砲山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第2集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1985 「愛宕山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第3集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1986 「瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第4集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1987 「二子山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第5集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1988 「丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第6集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 2004 「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』 第17号 埼玉県立さきたま資料館
- 杉崎 茂樹 2007 「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』 第19号 埼玉県立さきたま資料館
- 杉崎 茂樹 2009 「稻荷山古墳出土土器の器種構成と出土位置に関連して」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第2号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 杉山 晋作 1992 「有銘文鉄劍にみる東国豪族とヤマト王権」『新版古代の日本』 第8巻 関東 角川書店
- 白井久美子 1983 「小規模古墳の一類型について—ブリッジ付き円墳の検討—」『古代』 75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 白石太一郎 1969 「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』 第16巻 1号 考古学研究会
- 白石太一郎 1985 「年代決定論」『岩波講座日本考古学』 I 岩波書店
- 白石太一郎 1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第44集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 2009 「百舌鳥・古市大古墳群展—巨大古墳の時代」『特別展図録』 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 城倉 正祥 2011 「北武藏の埴輪生産と埼玉古墳群」 2008年度～2010年度科学研究費補助金 若手研究 (B)研究成果報告『古代工房の復原的研究—埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に—』 奈良文化財研究所
- 関 義則 1991 「逆刺独立柳葉・三角形族の消長のその意義」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団10周年記念論集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 一夫 1991 「埼玉における古代窯業の展開」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団10周年記念論集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋一夫・本間 岳 1994 「將軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』 第29号 埼玉県
- 高橋 一夫 2005 a 「墳丘造り出しと中堤張り出し—埼玉古墳群理解のために—」『考古学資料館紀要』 第21輯 國學院大學考古学資料館
- 高橋 一夫 2005 b 「鉄劍銘一一五文字の謎に迫る・埼玉古墳群」『シリーズ「遺跡を学ぶ016」』 新泉社
- 田中 広明 1989 「緑泥片岩を運んだ道—変容する在地首長層と労働差発権—」『土曜考古』 第14号 土曜考古学研究会
- 田中 広明 1990 「上毛野・北武藏の古墳時代後期の土器生産—土器生産の展開と在地首長制—」『東国土器研究』 第2号 東国土器研究会
- 田中 広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給—有段口縁壺の展開と在地社会の動態—」『埼玉考古学論集』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 正夫 1994 「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡(A区)』 (財)埼玉県埋蔵文化財

調査事業団 第104集

- 塚田 良道 1992 「東国の伽耶文化」『考古学ジャーナル』 第350巻 ニューサイエンス社
- 塚田 良道 1998 「女子埴輪と采女一人物埴輪の史的意義一」(上)・(下)『古代文化』 第50巻 第1・2号
(財)古代学協会
- 都出比呂志 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究』 雄山閣
- 天理市教育委員会 2000 「西殿塚古墳 東殿塚古墳」 天理市埋蔵文化財調査報告 第7集
- 十河 良和 2003 「百舌鳥古墳群の立地に関する基礎考察」 関西大学考古学研究室開設五周年記念 考古学論叢 上巻
- 利根川章彦 2002 「稻荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』 第15号 埼玉県立さきたま資料館
- 利根川章彦 2003 「「武藏国造の乱」はあったか」『調査研究報告』 第16号 埼玉県立さきたま資料館
- 中井 正幸 2005 「第3章 古墳の造営と儀礼の共有 第6節 古墳の築造と儀礼の変容」『東海古墳文化の研究』 有山閣
- 中村 倉司 1999 「妻沼低地(岡部町・深谷市)の古墳時代集落と埼玉古墳群」『岡部条里／戸森前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村 倉司 2010 「埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳—武藏国造家内紛と大型円墳—」 埼玉県立史跡の博物館紀要 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 中山 浩彦 2003 「稻荷山古墳外堀の陸橋部について」『調査研究報告』 第16号 埼玉県立さきたま資料館
- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号
- 広瀬 和雄 2003 「前方後円墳国家」 角川選書355 角川書店
- 広瀬 和雄 2010 「前方後円墳の世界」 岩波新書
- 福田 聖 1998 「末野遺跡I」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第196集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤倉 明 2010 「万葉集における「埼玉の津」」「さいたまの津を考えるシンポジウム資料」 野外調査研究所
- 北条 芳隆 2009 「第二の「大和」原風景—佐紀古墳群と平城京条坊地割—」『日々の考古学2』 東海大学文学部考古学研究室編
- 穂積 裕昌 2005 「墳頂部方形区画と『東方外区』」『石山古墳』 三重県埋蔵文化財センター
- 堀口 万吉 1981 「歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ19』 株式会社クボタ
- 増田 逸朗 1980 「埼玉古墳群の立地と環境」『埼玉稻荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 増田 逸朗 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』 新人物往来社
- 増田 逸朗 1991 「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田 逸朗 1999 「辛亥銘鉄劍と武藏国造—乎獲居臣と笠原直使主—」『國學院大学考古学資料館紀要』 第15輯 國學院大学考古学資料館
- 松田 度 2007 「造り出しにみる埴輪配置の構造」 同志社大学考古学シリーズIX『考古学に学ぶ(III)』 森浩一先生傘寿記念献呈論集 松藤和人編
- 宮代 栄一 1996 「古墳時代における馬具の層年代—稻荷山古墳出土例を中心に—」『九州考古学』 第71号
- 森田 克行 2008 「新・埴輪芸能論」 大阪府立近つ飛鳥博物館編『埴輪群像の考古学』 青木書店
- 森田 悅 1992 『古代東国と大和政権』 新人物往来社
- 山本 靖 1991 「利根川南岸地域の前方後円墳の展開」『専修考古学』 久保哲三先生追悼号 専修考古学会

- 吉井 理 2009 「関東地方における前方後円墳の墳丘方位について」『日々の考古学 2』 東海大学文学部考古学研究室編
- 吉川 國男 1998 「雄略紀所載の武藏国直丁と稻荷山鉄劍銘について」『調査研究報告』 第11集 埼玉県立さきたま資料館
- 吉田 稔他 1997 「築道下遺跡 I」 行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告 I 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第188集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉村 公男 1999 「古墳の正面観」『考古学に学ぶ』 同志社大学考古学シリーズ I 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 若狭 徹 2007 「第四章 首長居館と水の祭祀」『古墳時代の水利社会研究』 学生社
- 若松 良一 1993 「二子山古墳・瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第8集 埼玉県教育委員会
- 若松 良一 1993 「からくにへ渡った東国の武人たち—埼玉將軍山古墳と房総の首長をめぐって—」 法政考古学第20集記念論文集 法政考古学会
- 若松良一他 2007 「武藏埼玉 稲荷山古墳」 史跡埼玉古墳群稻荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書 埼玉県教育委員会
- 和島誠一・甘粕 健 1958 「武藏の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』 第1巻
- 和田 晴吾 1996 「墓拡と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査」『立命館大学考古学論集 I』 立命館大学考古学論集刊行会
- 和田 晴吾 2009 「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第152集 国立歴史民俗博物館